

河北省 · 北京市





避暑山莊
外八廟

金山嶺長城

黃崖関長城

清東陵

盧溝橋

周口店

清西陵

<日程>

1日目：名古屋 → 北京 → 承德

金山嶺長城

(承德泊)

2日目：

避暑山莊

普寧寺

外八廟

普陀宗乘之廟・須彌福壽之廟

普樂寺・安遠廟

(承德泊)

3日目：

黃崖關長城

清東陵

恭王府

雍和宮

(北京泊)

4日目：

清西陵

周口店

盧溝橋

(北京泊)

5日目：

南海・北海

鐘樓

古觀象台

北京 → 名古屋

金山嶺長城



北京から北東へ 130 キロ、河北省と北京市の境にある長城。

全長 47.5 キロのレンガ造りで、標高千メートルの険しい峰にある。

明代に、名将「戚継光」が、モンゴル軍の侵入防止のために修築した。

金山嶺長城付近は、数百メートルの間隔で見張台が建てられ、正方形のものも円形のものもある。

黄崖関長城



天津市薊县城から北へ 30 キロにある長城。

隋代に創建されたもので、東は河北省遵化県の馬蘭峪長城、西は北京平谷県の將軍関長城へとそれぞれつながっている。

全長は約 42 キロ。

1987 年になって、天津市が万里の長城再建に乗り出し、この区間の長城が再びその雄姿を現すこととなった。

黄崖関は、薊県域内で唯一の関所で、薊県と河北省興隆県の間を結ぶ主要な街道でもあった。北方からの侵入を防ぐのに適した非常に険峻な地形が利用されている。

標高 300m にある関城は、その東西両側の崖がまるでえぐり削られたかのように険しいところに築かれている。

この崖を夕陽が照らすと幾筋もの黄金色の光が反射して見えることから、黄崖関という名になったといわれる。

承德市 ChengDe

位置と地勢

承德市は河北省の北部に位置し、河北省の直轄市のなかでは唯一全域が長城の外側に位置している。

北は内蒙古自治区、東は遼寧省、南は北京市と天津市と連なり、西と東南は同じ河北省の張家口市・秦皇島市・唐山市とそれぞれ接している。

首都北京からの距離は 230 キロ、河北省の省都・石家荘からは 540 キロの距離がある。

人口は 355 万人で、満州族・モンゴル(蒙古)族・回族・朝鮮族など 25 の少数民族が 130 万人を占めている。少数民族の中では満州族とモンゴル族の割合が比較的高い。

歴史

商の時代には「土方」と呼ばれ、西周の時代には燕王の封地とされた。

春秋戦国から前漢にわたっては漁陽郡と右平郡の管轄に置かれ、後漢から南北朝にかけては北方少数民族の烏桓や鮮卑の版図に含まれた。

隋唐時代には漢民族と少数民族が雑居する地域となり、北方民族の建てた遼・金・元の時代には澤州(遼)・興州(金・元)と呼ばれた。

明代には長城の外側の防衛拠点の一つとして、北平府・興州衛・諾音衛などと名称が変わった。

承德が歴史上で重要な地位を得るようになったのは、1703 年(清の康熙 42 年)に熱河行宮(避暑山荘)の造営が開始されてからで、この後、承德は清朝の夏の宮殿として陪都的な役割を持つようになる。

康熙帝以降の雍正帝・乾隆帝・嘉慶帝なども 1 年の半分をこの地で過ごし、第二次アヘン戦争中の 1860 年には咸豊帝が北京からこの地に逃れている。

嘉慶帝と咸豊帝が崩御したのも避暑山荘。

辛亥革命(1912 年)に中華民国が成立すると、熱河特別区がおかれ、1928 年には熱河省が設置され、承德はその省都となった。

満州事変後の 1933 年には日本軍が全域を占領し、熱河省は満州国の版図に組み込まれることとなる。

1945 年に日本が降伏すると、一時的に共産党の冀察熱遼解放区となるが、翌年には国民党軍が占領、最終的には 1948 年 11 月に人民解放軍によって解放された。

新中国成立後の 1955 年までは旧来の熱河省が維持されたが、1955 年 12 月に熱河省は廃止され、承德は河北省に組み込まれることになった。

その後、省直轄市及び省下の地区専署の間で帰属が度々変更されたが、1993 年に省直轄地に戻り現在に至っている。

避暑山莊と外八廟



中国・河北省承德市(北京から 230 キロ離れ)以北の武烈川西側の細長い谷地にあり、清代皇帝が夏に避暑しながら政務を処理する場所であった。

1703 年から建て始め、清朝の康熙・雍正・乾隆三代の王朝を経過して、90年もかかったという。

北京の紫禁城に比べてみると、避暑山荘はシンプルな田園風景が自然のまま保存されており、現在残っている一番広い皇家宮殿である。

昔、康熙皇帝が北へ巡視途中に承德を見つけた。

景色がよく、満清の発祥地-中国の北国にも直結し、モンゴル各部への統治にも便利な、いい場所だと思い、ここに宮殿を建てることをきめた。

康熙四十二年(1703 年)から建て始め、周囲の環境を整え、宮殿を建て、康熙五十二年(1713 年)まで36 個の景点を完成した。

雍正年間に施工は一時的に中止されたが、乾隆六年(1741 年)から乾隆五十七年(1792 年)まで引き続き施工し、完成にこぎ着けた。

完成された避暑山荘は36 個の景点と、山荘外の外八廟という建物も含め、総面積が564 万平方メートルもあり、壮大な景色になった。

避暑山荘の周囲は、半月形に12 基の雄壮偉大で、風格が異なる寺院が取り巻いている(現存は7 基)。

寺院の建築は漢、満、モンゴル、チベット族の建築風格の美点を採用し、それらを見事に融合させている。

1994 年、国連の教育・科学・文化団体は避暑山荘と周囲の寺院を、世界遺産に登録した。

避暑山荘

宮殿区と風景区に分かれており、風景区はさらに湖景区、平原区、山景区に分かれている。

宮殿区

避暑山荘の南端に位置し、総面積は4万㎡。

ここには、歴代皇帝の宮殿や居室など多くの建築が集中している。

主なものとして南から順に、避暑山荘の主殿にあたる澹泊敬誠殿、四知書屋、煙波致爽殿、雲山勝地楼、松鶴齋などがある。

麗正門 麗正門 / LiZhengMen



避暑山荘全体の正門。

1754年(清の乾隆19年)の創建で、“乾隆三十六景”の第一景とされる。

門前には石獅子と下馬碑が並ぶ。

門の上部には閣楼が、下部には三つの扉が設けられている。

中央扉の上方に掛かる額には、漢族、満州族、モンゴル族、チベット族、ウイグル族のそれぞれの文字で、“麗正門”という三文字が刻まれている。

この麗正という言葉は「易経」から採ったもので、これには各民族の融和と平和的団結への思いが込められている。

澹泊敬誠殿 澹泊敬誠殿 / DanBoJingChengDian



麗正門を入り外午門・内午門とくぐると避暑山荘の正殿・澹泊敬誠殿がある。

内午門前の広場は、歴代皇帝が承德で巻き狩りを行うに先立ち弓射の試合を行った場所で、門上には康熙帝直筆の「避暑山荘」の扁額が掛けられ、広場の東西両壁に乾隆帝御製の「閲射六韻」詩が刻まれている。

澹泊敬誠殿は1710年(清の康熙49年)に建てられ、その後1754年(清の乾隆19年)にすべて楠を用いて建て直された。そのため「楠殿」とも呼ばれている。

幅9間・奥行3間の大型建造物で面積は583平米、雨天の日には楠の良い香りが殿内に充満したという。

殿内に掲げられている「澹泊敬誠」の額は康熙帝の御筆で、扉には蝙蝠や「萬」字、「寿」字などが精巧に浮き彫りされている。

この建物は主に毎年「万寿節」(皇帝の誕生日)やその他の慶事の折りに皇帝が王侯大臣や外国使節を接見するために使われ、1780年(乾隆45年)、乾隆帝の誕生祝いの為にチベットからやってきたパンチェン・ラマ六世もこの場所で乾隆帝に接見した。

四知書屋 四知书屋 / SiZhiShuYuan



四知書屋は、澹泊敬誠殿の後ろに建っている。

1711年(清の康熙50年)の創建で、当初は“依清曠”と名付けられた。

その後1786年(清の乾隆51年)になって、“四知書屋”と改称された。

四知という言葉は、『周易一系詩』という書のなかの“君子知微、知彰、知柔、知剛、万物之望”に由来

している。これは乾隆帝の治世思想の表れでもあった。

四知書屋は、皇帝が澹泊敬誠殿で式典を行なう際に着替えをしたり休憩をとったりする場所であり、また、日常の政務を執り行う場所でもあった。

庭に設けられた遊廊によって澹泊敬誠殿とつながっている。

また、乾隆帝はここでパンチェン・ラマ6世やモンゴルの王族など多くの各民族の指導者らと引見した。

煙波致爽殿 烟波致爽殿 / YanBoZhiShuangDian /



四知書屋の後ろにある。1710年(康熙49年)の創建で、皇帝の居所・寝室として使われた。

幅7間、奥行3間の建物で、中央には玉座が設けられ皇帝はここで后妃たちの拝謁を受けた。西側の部屋は仏堂で東側にあるふたつの部屋は皇帝と大臣らが会議を行なった場所だ。

東西両側に建つ建物は、皇后や妃の居室。

なかでも西側に建つ西暖閣は、西太后の寝殿だったことで有名。

建物内にあるベッドの後ろの壁は二重構造になっている。
外側の壁はレンガ、内側の壁は木板で造られており、その内部には狭い通路があって東西の建物とつながっている。

康熙帝がこの場所を「四周秀丽 十里平湖 致有爽气」(周囲の風景画美しく、穏やかな湖からは爽やかな空気が流れ込んできている)と言ったことから名前が付けられ、康熙帝・乾隆帝・嘉慶帝は承德を訪れた時には必ずここを居所とした。
また 1860 年(咸豊 10 年)に英仏連合軍の北京侵入により都落ちした咸豊帝もここに移り住んだ。ちなみに嘉慶帝と咸豊帝はこの建物で崩じている。

雲山勝地楼 云山胜地楼 / YunShanShengDiLou /



煙波致爽殿の後ろで、宮殿区が一番奥にある雲山勝地楼。

1710 年(康熙 49 年)の創建。

楼閣は 2 階建てだが、楼内に階段はなく、建物そばの築山の石の階段をつかって 2 階に上がる。2 階に立って遠く四方を眺めると、磬锤峰や普樂寺、南山積雪亭などの景色が見える。

また、湖景区のほうを見下ろすと、楼閣などの建物や自然の景色を一望に収めることができる。

2 階の西側の間には仏堂蓮花室があり、そこに青玉観音像が納められている。毎年の中秋節には、皇后がここへやって来て月を祭り幸福を祈った。

この楼閣の北側にある“岫雲門”をくぐると、その先は風景区となる。

松鶴斎 松鶴齋 / SongHeZhai /



宮殿区の東側中央に建つ松鶴斎は、1749 年(清の乾隆 14 年)の創建。

聖憲皇太后(乾隆帝の母)のために造られた宮殿で、長寿の願いを込めて松と鶴の文字を使い、松鶴斎と名付けられた。

この松鶴斎の後ろには、樂寿堂、十七間房、綏成殿、暢遠楼などの建物がある。

そのうち綏成殿は、嘉慶帝が若かりし頃に住んでいた場所。
また、1832年(道光12年)以降は清の歴代皇帝の位牌を祭る場として使われた。
不寿堂は聖憲皇太后の寝殿で、嘉慶帝も晩年のほとんどをここで過ごした。
暢遠楼の外観は、“雲山勝地楼”と似ており、建物の上から湖景区の風景を一望できる。この後ろにある垂花門を出ると、万壑松風殿がある。

湖景区

宮殿区の北に位置する。

湖には西に環碧、北に如意、東に月色江声の3島が浮かび、これらは橋でつながっている。環碧島の北側にある採菱渡は、かつて女官たちが舟に乗って湖に自生する菱を採取するための渡し場だった。

如意洲に建つ延薰山館は皇帝が政務を執り行う場として使われていた。

この北側にある青蓮島には煙雨楼があり、そのまま湖に沿って北上すると、清代の七大蔵書閣のひとつである文津閣に至る。

如意洲 RuYiZhou /



湖の中央、月色江声島の北側に位置する如意洲。面積は3万5000㎡で、湖景区にある3つの島の中で最大。

ここに建つ楼閣などの建築はほぼ完全な状態で残っており、その造りは非常に精巧なものが多い。

中国北方の四合院建築の特徴と、江南地方の庭園の手法を併せ持つ美しい風景が広がる。

この島には他に、無暑清涼、観蓮所、金蓮映日、水

芳岩寿、延薰山館、一片雲、滄浪嶼などの建築がある。

煙雨楼 YanYuLou /



如意洲の北側にある青蓮島に建つ煙雨楼。

1780年(清の乾隆15年)に、浙江省嘉興の南湖にあった煙雨楼を忠実に模して建てられた。

南から北へ順に、門殿、2階建ての楼閣が並ぶ。

赤い柱に青い瓦屋根、その周囲には回廊がある。

2階には乾隆帝直筆の“煙雨楼”という額が掛かっている。

楼閣の東側にある“青陽書屋”は皇帝の書斎、また西側には“対山齋”という部屋があり、東西それぞれ3間の部屋があった。

これらの楼閣、別間、書斎は回廊でつながっている。

また、東北の方向には八角軒亭、東南には四角方亭、西南には石を積み重ねた築山があり六角涼亭と名翼亭が建っている。

この築山の下方にある洞窟をくぐり石段を登って上がったり、六孔石洞を通り抜けて煙雨楼に到ることもできる。

煙雨楼は澄湖にある建物のうち最も高い建物で、遠く万樹園、熱河泉、永佑寺まではっきりと見える。夏と秋には湖面に蓮の花が咲き乱れ、湖上に霧がたち込める様子はまさに煙雲と呼ぶにふさわしく格別の美しい眺めだ。

平原区

万樹園 万树园 / WanShuYuan /



一面に草原が広がる平原区の東北部にあり北に山麓、南は澄湖に面している。

ここには、乾隆帝直筆の“万樹園”という文字が刻まれた丸い石碑が残っている。

園内は自然がそのまま活かされ、土木工事は一切施されていない。

乾隆帝がモンゴルの王侯貴族や外国使節に接見するための包(パオ)が置かれた。

パンチェン・ラマ 6 世や、イギリス、ミャンマー、ベトナム、朝鮮、ラオスなどの各国使節と接見した記録が残っている。

また、ここで酒宴を催すこともあり、「万樹園賜宴図」などの絵図が今も伝わっている。

なお、平原区の南部にあたる澄湖の畔には、この草原の風景を詠んだ乾隆帝の詩“緑毯八韻”が刻まれた碑が建っている。

文津閣 文津閣 / WenJinGe /



1774年(清の乾隆39年)に浙江省寧波の範氏天一閣を模して建てられた。

楼閣の東側にある碑亭には「文津閣碑記」が立っている。

北京の故宮内にある文淵閣、円明園の文源閣、瀋陽の故宮内にある文溯閣と合わせて“四閣”とも称され、皇家の書庫として使用されていた。

楼閣のひさしは2層に見えるが、実際は内部にもう1層あって3層構造になっている。内部に層を増やすことにより直射日光が入るのをより効果的に防げる仕組みになっている。楼閣上部には乾隆帝直筆の“文津閣”の額が掛かっている。

前方にある池の水面には築山や楼閣が映し出され、また、築山の上には東に月台、西に趣亭が建っており、風情のある景色が広がる。

内部にはかつて「四庫全書」や「古今圖書集成」が納められていたが、辛亥革命後に「四庫全書」は北京図書館へ移され、「古今圖書集成」は軍閥などの盗難に遭い、現在は行方がわからなくなっている。

山景区



避暑山荘の西北部に広がる起伏に富んだ山地で、避暑山荘の5分の4の面積を占める。

気候は非常に涼しく、承德市内に比べ4~5℃も低い。

ここには、四面雲山亭、南山積雲亭、鐘峰落照などがあり、素晴らしい眺めを楽しむことができる。

外八廟（ワイパーミャオ）

避暑山荘の東北にある山の麓には、12の皇室の寺院がある。

溥仁寺・溥善寺・普樂寺・安遠廟・普寧寺・普祐寺・広縁寺・須弥山福寿之廟
普陀宗乘之廟・広安寺・羅漢寺・殊像寺



その中の8つは、清朝政府が少数民族を支配するために制定した法規『欽定理藩院則列』により清朝政府が管理していたため、「外八廟」と呼ばれている。

ここは、清朝の皇帝が承德に滞在したときに政治を行った場所で、それぞれの寺院の建造は、当時の政治と密接に関係している。

清朝初年、中国のモンゴル・チベット区域（青海、新疆を含む）ではチベット仏教の影響が強く、人民はみな敬虔な仏教徒であり、その教義はモンゴル・チベットの人民の、精神的支柱となっていた。

ラマ教の中の重要な人々は、政治で地方の政権を有効に制御し、経済で多くの資金を収集し、教会を掌握した。

清朝の政府は北の地方の統制を強化し、国統一に強固にするために、国境地帯の少数民族の民族に対して、懐柔政策を実行する。

懐柔政策の重要な内容は、モンゴル・チベット区域の少数民族にたいして“仏教による習慣を変えない”を方針とする。

乾隆は「黄教を普及し、モンゴルを平和にし、保護しなければならない」と述べた。

清朝統制者は、モンゴル・チベットの人民の信仰を尊重し、地方自治体と中央機関の関係を改善させ、国民の統一を強化することを戦略構想とした。

普寧寺



普寧寺は世界一の大きな木彫りの観音菩薩像があるので、大仏寺ともいう。

清の乾隆時代に建てられた一番目のお寺である。

完備で規模が大きい。乾隆二十年（1755年）の創建で、四年掛けて造られた。

普寧寺がチベットの三摩耶寺（また桑耶寺ともいう）に真似して造った。

普寧寺は黄教格魯派のお寺で、丘の上に南向いて建てられた。

普寧寺の平面が中軸線上に配され、主要な建物が真ん中の大雄宝殿を境にし、前半は漢族仏教のお寺の様式にし、後半は桑鸞寺の基本的な特徴を持っている。

大仏の比例にむらがなく、服の線が垢抜けして流暢し、飾り物が精緻典雅で、今の世界中では一番高く大きい木彫りの仏像であり、中国乃至全世界の仏教芸術史上の傑作である。

漢族とチベット族の寺院様式を折衷する。

普寧寺の建造様式が独特で、漢族とチベット族の寺院様式を折衷する。

南の部分が漢地お寺の「七堂伽藍」の様式で、中軸線の上に山門、天王殿、大雄宝殿などが配され、両側に鐘鼓楼と東西配殿がなっている。

南北の長さが150メートルで、幅が70メートル。

北の部分がチベット式の寺院様式で、大乘閣を中心にし、周りが多くのチベット式の建築物——赤台、白台及び四所の白いラマ塔——が取り巻いている。

普寧寺で有名なのが大乘之閣だ。高さ9メートルの須彌壇の上に建っており、その両側には、18の高さが異なる仏教建築が配置され、完全な「曼陀羅」が構成されている。

高さ37.4メートルの大乘之閣は、真正面から見ると6層にひさしが重なり、天地と四方を表す「六合」の意味がある。後ろからは4層に見え、4種の曼陀羅を表し、両側から見える5層のひさしは、地、水、火、風、空を象徴している。

大乘之閣の中には、金漆の千手千眼観音菩薩が安置されている。この菩薩像は、高さ22.28メートルで、マツ、コノテガシワ、ニレ、シナノキ、スギの5つの木、120立方メートル、110トンの木材が使われ、世界最大の木彫の仏像でもある。

菩薩像は胸の前で合掌し、背中には40の手が取り囲んでいる。その手のひらには目がついていて、それぞれ法器を持っている。仏經の解釈では、手につけられた目は25の因果応報を表し、40の手は千の因果応報を表している。そのためこの仏像は、千手千眼と呼ばれ、多くの知恵と限りない神通力を象徴し、衆生を済度することができるといわれている。

普陀宗乘之廟



避暑山荘の北部の獅子嶺には、乾隆32～36年（1767～1771年）に、チベットのポタラ宮を模して造られた普陀宗乘之廟がある。

この建物は、山の地形に沿って建てられ、外八廟の建設では最も長い時間が費やされた。

敷地面積は 22 万平方メートル、外八廟の中では一番大きく雄壮な廟である。

乾隆 35 年（1770 年）は、乾隆帝が 60 歳を迎え、翌年は乾隆帝の母親が 80 歳を数える年だった。

その時には、多くの辺境の少数民族の王公や貴族が誕生祝いに訪れる。

乾隆帝は清王朝の威厳を現し、各少数民族の人たちの心を籠絡するため、そして蒙古、チベットの辺疆地区にはチベット仏教の信者が多いことを考え、ポタラ宮を模してこの廟を建てた。

普陀宗乘之廟の五塔門。黒、白、黄、緑、赤の塔は、密教の不動金剛仏、大日如来仏、宝源仏、不空成就仏、無量光仏の 5 仏を表している。

「普陀」は、観音菩薩が靈験を現すところ、「宗乘」は観音菩薩が伝える大乘仏法のこと、乾隆帝はここに観音菩薩の修行の場を建立した。

普陀宗乘之廟は、前、中、後の三つの部分に分かれ、楼、台、殿、閣、塔、亭など 200 あまりの建築物が建てられている。

山頂の大紅台は、廟の主要建築で、高さ 43 メートル、敷地面積は一万平方メートル以上ある。

大紅台の南側の中心の壁には、6 つの瑠璃製の仏龕が上下にはめ込まれ、その中には、乾隆帝の 60 歳という意味を含む、六体の無量寿仏が安置されている。

上部の東、南、西の三方面の女牆には、99 の瑠璃の仏龕が散りばめられ、「久久（永遠という意味で、九と久は発音が同じ）」の意を取って、乾隆帝の母の誕生祝いとした。

普陀宗乘之廟の大紅台の南側の壁の中央には、無量寿仏の仏龕がはめ込まれている

大紅台の中は、チベット式建築特有の、建物が集まった構造で、その中央にある万法帰一殿の屋根は、鍍金された魚の鱗のような銅瓦に覆われている

記載によると、この屋根を葺くために、11 万 7959 斤（約 58 トン）の銅、1 万 4000 両（約 880 キロ）の黄金が使われた。

普陀宗乘之廟が出来上がったちょうどそのころ、帝政ロシアの統治者は、ボルガ川流域で遊牧していた蒙古族のトルフト部族を奴隷のように酷使し、それに耐えられなくなったトルフト部族は、幾重もの障害を乗り越えて祖国へ帰った。

乾隆帝は、わざわざ万法帰一殿で祝典と大法会を行い、トルフト部族の首領を盛大にもてなした。

須彌福寿之廟



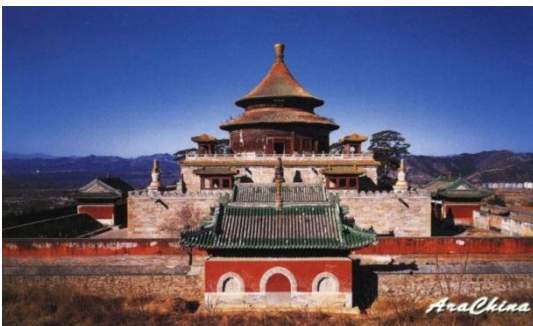
乾隆帝の 70 歳の誕生日に、各地の王公や貴族、チベット政教首領のパンチェン 6 世が、承德へ誕生祝いに訪れることを重視した乾隆帝は、チベットのシガツェのタシルンポ寺を模して、承德に須彌福寿之廟を建造し、パンチェンラマの承德での行宮にした。

須彌福寿之廟の大紅台にあるチベット式の盲窓。これは通風のために、窓の上部しか開けることができず、ラマ僧たちは外の景色を見ることなく、一心不乱に修行に励むように作られている

「須彌福寿」はチベット語の「タシルンポ」の訳で、仏が住む吉祥の地を意味する。須彌福寿之廟がある大紅台の中央には、28.8 メートルの妙高莊嚴殿があり、その中にはチベット仏教ゲルー派の創始者ツォンカパと、釈迦の塑像が安置されている。ここは 6 世パンチェンラマが乾隆帝のために説法した場所だった。

妙高莊嚴殿の屋根は、鍍金された魚の鱗模様の銅瓦が使われ、尾根には 8 つの金の竜が飾られている。その竜は、今にも空中に舞い上がるような姿で、中国の建築史の中ではまれに見る装飾である。

普樂寺



普樂寺は、避暑山荘の東側を流れる武烈河の対岸に建てられ、その中心の建物が、乾隆 31 年（1766 年）に建造された旭光閣だ。

円形の形をした旭光閣は、瑠璃瓦の屋根が 2 つに重なり、先がとがっている。

北京の天壇の祈年殿を模して建てられ、「円亭子」とも呼ばれている。

当時、北西辺境のカザフ、ウイグル、キルギスなどの少数民族と清政府との関係は、日増しに緊密になっていた。

寺は、謁見に来る王公や貴族たちの礼拝の場となり、辺境地区の各民族を団結させ、清王朝の支配を強める場所になった。

「普樂」という名前は、范仲淹の「岳陽楼記」（1046年）の詩句、「先天下之憂而憂、後天下之樂而樂（天下の憂いに先んじて憂え、天下の楽しみに後れて楽しむ）」からつけられている。

旭光閣の中にある円形の須彌壇の上には、別名「歡喜仏」と呼ばれる、大日如来の法身である勝樂金剛双身銅像が安置されている。

精巧な彫刻が施された天井は、外八廟の中では一番美しく、中国でもとても珍しい。木造の天井は九層に分かれ、各層の斗きょうには竜や鳳、天井の中心には、珠をくわえてとぐろを巻いた竜が彫られている。その技法は、浅い浮き彫り、深い浮き彫り、透かし彫りで、天井の各層を華やかで立体的にしている。

安遠廟



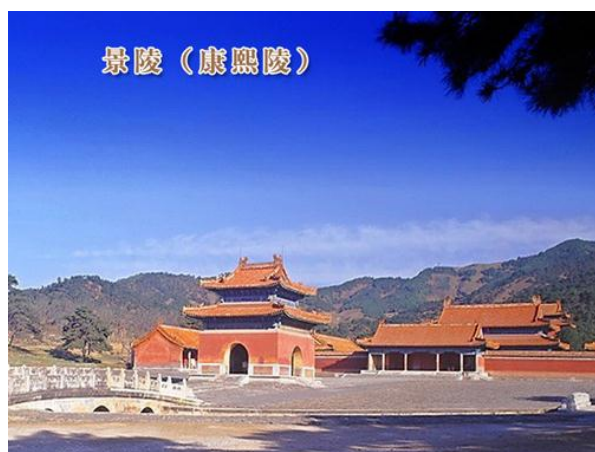
1764年に創建され、8つの寺院の中で最も規模が小さいそうです。

乾隆帝が新疆のイリ河岸にあったグルジャ寺をまねて造らせたので、イリ廟とも呼ばれる。

清東陵



孝陵（順治陵）



景陵（康熙陵）



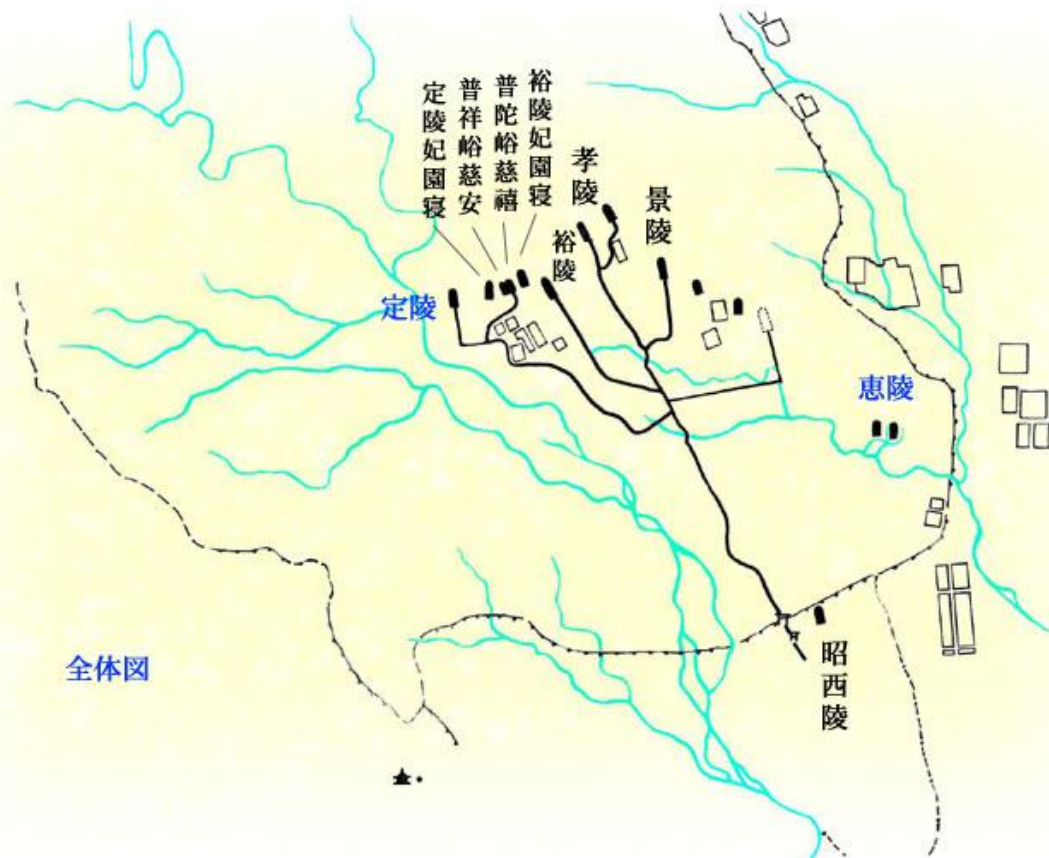
裕陵（乾隆陵）



定陵（成丰陵）



惠陵（同治陵）



河北省遵化県に位置する。

清朝の入関後最初の皇帝となった順治帝の孝陵を中心に、康熙帝の景陵、乾隆帝の裕陵、咸豊帝の定陵、同治帝の 惠陵など 5 人の皇帝の陵墓がある。

他、孝荘文皇后の昭西陵、東太后の普祥峪定東陵、西太后の普陀峪定東陵などの皇后陵や側室のための妃園寢などがある。

河北省易県の西陵とともに清朝皇帝の大規模陵墓が造営され、2000 年にユネスコの世界遺産（文化遺産）に登録された。

1928 年に国民党の軍閥孫殿英の軍隊によって略奪されるという東陵事件が起きる。

中でも乾隆帝の裕陵と西太后の定東陵は、墓室を暴かれ徹底的な破壊と略奪を受けた。

溥儀は国民政府に強く抗議したが、孫殿英は政府高官に賄賂を送ったために何ら処罰されることはなく、溥儀を大いに憤慨させた。東陵事件は溥儀の対日接近の契機になった。

清王朝（1644～1911 年）は、東北地方から山海関内に「入関」して以来、関内（現在の河北省）に2カ所の皇族陵園を建てた。

それが北京の東、河北省遵化市にある「清の東陵」と、北京南西の河北省易県にある「清の西陵」である。

清の東陵は、順治18年（1661年）に第3代皇帝・順治帝の孝陵を起工してから、光緒34年（1908年）に慈禧太后（西太后、第10代皇帝・同治帝の母）の定東陵が完工するまで、あわせて247年もの間、営造された。

ここには順治（在位1644～61年、孝陵）、康熙（同1662～1722年、景陵）、乾隆（同1736～96年、裕陵）、咸豊（同1851～61年、定陵）、同治（同1862～75年、慧陵）という5人の皇帝と15人の皇后、141人の皇妃が眠っている。

陵墓の総建築面積は113万平方メートルで、中国最大の古建築群といわれる北京の故宮よりも、10万平方メートル大きい。

中国に現存する皇族陵墓群のなかでは規模最大、最もよくシステム化され、完全なまでに保存された建造物となっている。

清の東陵に埋葬された皇族のなかには、清代の歴史に大きな影響をもたらした人が多い。たとえば、清の太宗・皇太極（第2代皇帝、在位1627～43年）の妃で、のちに2人の幼い君主（順治と康熙）を補佐した女性政治家の孝庄文皇后。

また「康乾盛世」といわれる繁栄の世を築いた康熙帝と乾隆帝、さらに二代の幼帝に代わって政権をにぎり、48年もの間、清朝を支配した慈禧太后などもそうである。

それらの陵墓はいずれも、貴重な歴史的価値がある。



孝陵の外観



孝陵神道の大紅門と功德碑楼



孝陵前の五つのアーチをもつ五孔大石橋



孝陵神道の前にある碑亭内の石碑



景陵の隆恩殿



景陵（康熙帝）の神道



定陵は咸豊帝の陵墓



同治帝の陵墓・恵陵



孝庄文皇后の陵墓昭西陵

清の東陵の場所選定と建築にさいしては、「居中為尊」（居中尊ぶとなす）、「長幼有序」（長幼の序あり）、「尊卑有別」（尊卑の別あり）という中国の伝統的な観念に基づいて、設計され、排列された。

中央に置かれた陵墓が、入関後第一代の皇帝・順治帝の孝陵であり、ほかの皇帝陵は長幼の序にしたがって、その左右に扇形に並べられた。

皇后と皇妃の陵墓や陪塚は、それぞれ当時の皇帝陵墓のかたわらに建立された。

また、皇后陵の神道（墓前に通ずる道）は、いずれもそれぞれの皇帝陵の神道に通じているが、各皇帝陵の神道も中軸線上の孝陵の神道とつながっており、それは巨大な「枝状体系」をなしている。

清王朝がいつまでも発展しつづけ、子々孫々繁栄していくことを意味しているのである。



清の東陵の主神道・孝陵神道は全長五千五百メートル

全長 5500 メートルの孝陵の神道は、清代の皇帝陵のなかでは最長・最大で、最も芸術性に富むものだ。

神道には順に、大牌坊（大きな鳥居形の建物）、大紅門、功德碑楼、石像生（人や動物の石像）、竜鳳門、隆恩門、隆恩殿、明楼、宝頂が並んでいる。

木造を模した白石の大牌坊は、幅 31・35 メートル、高さ 12・48 メートル。

表面には麒麟、獅子、雲竜、獣などが刻まれ、そのすばらしい彫刻技術は中国でもまれに見るものである。

神道の両側には、あわせて 18 対の石像がある。文官 3 対、武官 3 対、立像と伏像の馬、ゾウ、ラクダが各一対、また立像と座像の麒麟、荀狚（伝説上の猛獣）、獅子が各一対である。

これらの石像は、神道の両側に 800 メートル以上もの勇ましい隊列をくんでいる。皇帝陵にいっそう厳粛な雰囲気を与えるものだ。



裕陵の地下宮殿



裕陵の方城明楼



裕陵の地下宮殿
乾隆帝と皇后、皇妃の棺が置かれた場所

裕陵は乾隆帝の陵墓である。

この陵を建設したころは、国が隆盛をきわめ、国庫も豊かな時期にあった。

そのため、全国の名匠たちがここに集まり、多額の資金を投入した巨大プロジェクトとなったのである。

裕陵の地下宮殿はすでに開けられているが、そのなかのあらゆる壁、天井、門楼などには、仏教をテーマとした彫刻がびっしりと施されている。仏像、供養人、神獣、法器、経文などである。

仏教を信奉した乾隆帝は、これらの神仏に伴われ、保護してもらいたかったのであろう。これまでに発掘された中国の地下宮殿のなかで、こうした仏教彫刻があるのは裕陵だけ。そのためここは「石刻芸術の宝庫」「荘厳で穏やかな地下仏堂」と称されている。



定東陵は咸豊帝の二人の皇后、慈安（右）と慈禧（左）の陵墓。所在地によって区別され、慈安陵は普祥峪定東陵、慈禧陵は普陀峪定東陵とそれぞれ呼ばれている



普陀峪定東陵の隆恩殿の階段にある石板。竜と鳳凰が彫り込まれている。普陀峪定東陵の竜と鳳凰のデザインは、いずれも鳳凰が上で竜が下だ



普陀峪定東陵の隆恩殿内のとがたの梁と天井にほどこされた彩色画は、いずれも金箔されており、輝いている

定東陵は、清の東陵のなかでは最後に立てられた陵墓である。普祥峪と普陀峪に分けて建てられた二つの陵墓からなり、それぞれ咸豊帝の東太后・慈安と、幼帝に代わり 48 年間も中国を治めた西太后・慈禧が葬られたところである。

慈禧太后は、普陀峪定東陵が完成した 16 年後にその権力を利用して、「(建設後) 長い年月が経ったので、修築が必要である」という理由で、陵墓をさらに 13 年間にわたって修築させた。そのため、それはより美しく、豪華なものとなったのである。

普陀峪の陵恩殿とその両側の配殿にある 64 本の柱には、柱にからまる金色の竜が描かれており、梁などの木造部分にはいずれも金箔が施されている。

三つの殿内の壁には「万福万寿、寿福綿長」を意味する 30 枚の吉祥模様を彫刻したレンガがある。それはあわせて 237 平方メートルにおよび、すべてに金箔が施されている。

この箇所だけで 4592 両（143・5 キロ）の黄金が使われており、きらびやかで美しい。これは清の東陵だけでなく、明・清時代の皇帝陵のなかでも、また宮廷建築のなかでも他にはないものである。

普陀峪定東陵にある「竜鳳図」は、いずれも鳳凰を上、竜を下としたデザインになっている。竜が上、鳳凰が下という、竜を主とした伝統的なパターンに反しているが、そこからは慈禧太后の強い権力欲がうかがえる。

清の東陵は、皇帝と皇后の陵墓のほとんどが長さ 20 キロほどの陵壁のなかに集中しているが、順治帝の生母・孝庄文皇后の昭西陵だけはポツンと大紅門東側の陵壁の外に建てられ、特例となっている。

昭西陵のこの特殊な場所は、陵墓の主の伝奇的で輝かしい生涯を物語っている。彼女は若いころ、太宗・皇太極の政務を助け、清の政権が中原に入るための基礎をつくった。皇太極が突然逝去した後、政治を熟知していた彼女は、多くの親王たちが皇位を奪おうとした混乱状態のなかで、知恵と才覚でそれらの親王たちを退け、自らの 6 歳の息子を皇位につかせた。つまり、それが順治帝である。以降、内乱もおさまった。

順治 18 年（1661 年）、24 歳の順治帝は天然痘にかかり、危篤に陥った。そこで孝庄文皇后は、すでに天然痘を治して、免疫力のある玄・を皇位の後継者にしようと主張した。

順治帝が逝去してから、八歳の玄・、つまりのちの康熙帝が即位し、当時 49 歳の孝庄文皇后は、またもや皇帝の政務を補佐した。

康熙帝が清王朝を繁栄させえたのは、孝庄文皇后の才知と密接なかかわりがあったといえよう。

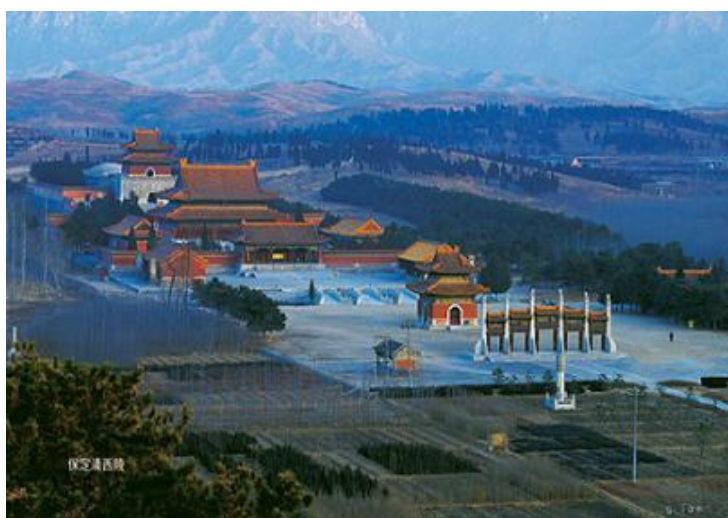
康熙 26 年（1688 年）、75 歳の孝庄文皇后が病のために亡くなった。清朝の伝統的な規定によれば、遼寧省瀋陽に陵墓が建てられた清の太宗・皇太極と合葬すべきであるが、太宗と合葬されたくなかった孝庄文皇后は、病床にあって康熙帝に次のように遺言した。

「太宗の棺は埋葬されて時が経ち、卑（身分の低いもの）は尊（身分の高いもの）を動かし

てはならない。こうした時に合葬するのは都合が悪い。もし新しい陵墓を造るなら、多くの人力が必要になり、合葬する意味がない。わが子孫を恋しく思い、離れたくない。必ず遵化に安置してもらいたい。これで遺憾なし」と。

こうして、孝庄文皇后の棺は東陵の風水壁の外に埋葬された。昭西陵は東陵と体系的に区別された。と同時に、子孫のそばに安置してほしいという孝庄文皇后の願いもかなえられたのである。

清西陵





河北省易県に位置する。

雍正帝の泰陵、嘉慶帝の昌陵、道光帝の慕陵、光緒帝の崇陵など 4 人の皇帝陵や皇后陵、側室のための妃園寢などで構成される清朝皇室の陵墓群。

河北省遵化市の清東陵などとともに明・清王朝の皇帝墓群として、2000 年にユネスコの
世界遺産（文化遺産）に登録された。

清西陵には宣統帝溥儀の陵墓も造営される予定だったが、辛亥革命により工事が停止し、完成することはなかった。

1995 年に西陵に隣接する民間墓地「華龍皇家陵園」の経営者が、墓地の知名度を上げる
目的で、溥儀の最後の夫人李淑賢に溥儀の墓を造ることを提案し、それに同意した李淑賢に
よって同墓地内に溥儀の墓が造られた。

周口店



周口店の北京原人遺跡は、中華人民共和国の周口店にある北京原人の骨や遺物の発掘現場であり、1921年から精力的な発掘作業により北京原人の骨が発見された。1987年に、ユネスコの世界遺産に登録された。

周口店遺跡は、約25万年前から40万年前に住んだと思われる北京原人の遺跡である。

ユハン・アンデションが、1923年に原人のものと思われる歯を発見した。

その後、漢方薬に使われる竜の骨（竜骨）とされる化石が掘り出されていた竜骨山で1929年、中国人学者の裴文中が完全な頭骨を発見した（1941年に頭蓋骨は紛失してしまい、現在も行方不明である）。

付近は石灰、石材の産地でもあるため、毛沢東時代には、1958年から1960年にかけて実施された大躍進政策の一環として「工業を大いにおこそう」というスローガンのもと、多数の関連工場が建設された。

しかし、工場建設や原料採取のために、多くの遺跡が埋没したり、破壊されたりした。

1986年になってようやく、中国共産党は考古学者達の意見を容れ、遺跡から工場群を移転させた。

盧溝橋



金代の明昌3年（1192年）に完成し、その後度々修復が施されている。

全長266.5m、11幅のアーチからなり、各アーチは長さ11m、扁平率0.69の楕円形。

橋の欄干には、それぞれが異なる表情や姿をした計501基の獅子の彫像が置かれている。

この獅子像の数を通行人が正確に数えることは難しいことから、中国語では「数えられないもの」のことを「盧溝橋の獅子」と言い表すこともある。

かつてこの地を訪れたマルコ・ポーロは、その著書『東方見聞録』の第4章の中で、この橋が「世界中どこを探しても匹敵するものがないほどの見事さ」と記した。

そこから、西欧ではこの橋のことを「マルコポーロの橋」と呼んでいる。

盧溝橋の名は、民国26年（1937年）7月7日にこの地で起きた謎の発砲事件・盧溝橋事件の名とともに、日本でも広く知られるようになる。

この事件が引き金となって日本の支那駐屯軍と中華民国の国民革命軍が衝突、これが日中戦争の発端となった。

中華人民共和国の成立後は、路面が舗装されて自動車の通行も可能になったが、橋の老朽化が著しく進行したため、1980年代には史跡保護を目的に大規模な修復工事が施され、以後自動車の通行は一切禁止された。

路面は舗装されたままだが、橋の中央部には昔日の石畳が一部復元されている。

橋のたもとには乾隆帝の筆と伝えられる「盧溝曉月」の石碑がある。

皇帝がここで月を見たということから、現在も中秋の名月の夜には月見に多くの市民が訪れる。

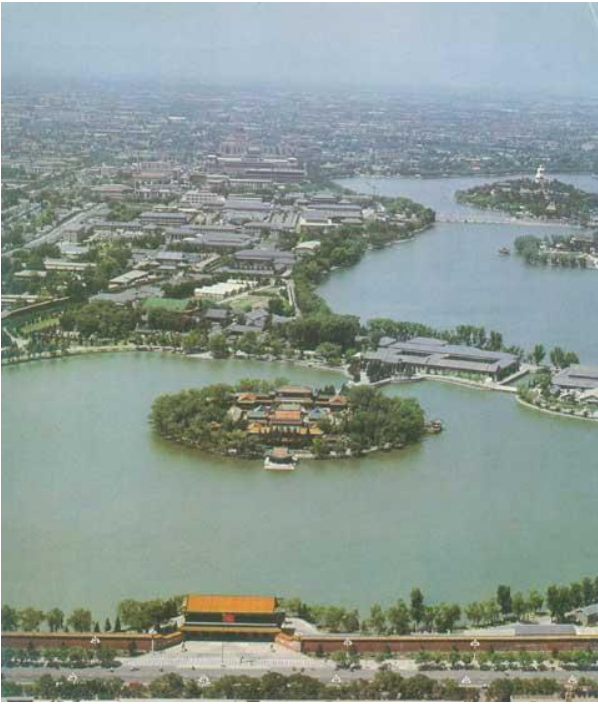
東側には明末に建設された城郭都市・宛平県城があり、城内に中国人民抗日戦争紀念館がある。

盧溝橋事件（ろこうきょうじけん）は、1937年（昭和12年）7月7日に北京（北平）西南方向の盧溝橋で起きた日本軍と中国国民革命軍第二十九軍との衝突事件である。

中国では一般的に七七事変と呼ばれる。

この事件は支那事変（日中戦争）の直接の導火線となった。

中南海



北海



霊山（瓊華島）、秀水（北海）、白塔で知られる王室御園だった場所。

瓊華島にある白塔は 1651 年に建てられ、高さは 35.9 メートル、白塔の土台（須弥座）はレンガと石で築かれている。

鬱蒼と生い茂る松柏の間に殿と閣が林立し、これらの殿や閣は水際を通る回廊でつながっている。

公園南門の西側にある団城は、北京城の中の城であり、団城の真中に承光殿があり、城台の上に金の時代に植えたマツの木があり、現在まで 800 余年の樹歴がある。

鐘楼



鐘楼と鼓楼は、中国の古代、時を知らせるために作られた建築物。

北京市の南北を貫く中軸線の北端に位置し、全国重点文物保护单位（重要文化財）に指定されている。鐘楼と鼓楼の 2 つの建物は南北に配置され、元、明、清の時代には、太鼓や鐘を使って時を知らせていた。

城門のやぐらのような建築様式で、芸術的な価値も高く、著名な観光スポットとなっている。

古観象台



北京古観象台は世界でも歴史が古く、明代の 1442 年に作られた。

しかも 1929 年までは観測を続けていたといい、同じ地点で観測を続けた施設としては世界最古にあげられる。

当時のままの機材を保存、展示して博物館としての役割を果たしている。

明代に作られたころは「観星台」と呼ばれ、清代になって「観象台」、その後は、「国立天文陳列館」「北京天文館」などとも称され、1983 年から一般広く公開されるようになった。

建造の目的は、皇帝専用だった。博物館の展示室、入口には「観象授時（空を見て時を知る）」という康熙帝の書いた額がいまでも残っている。

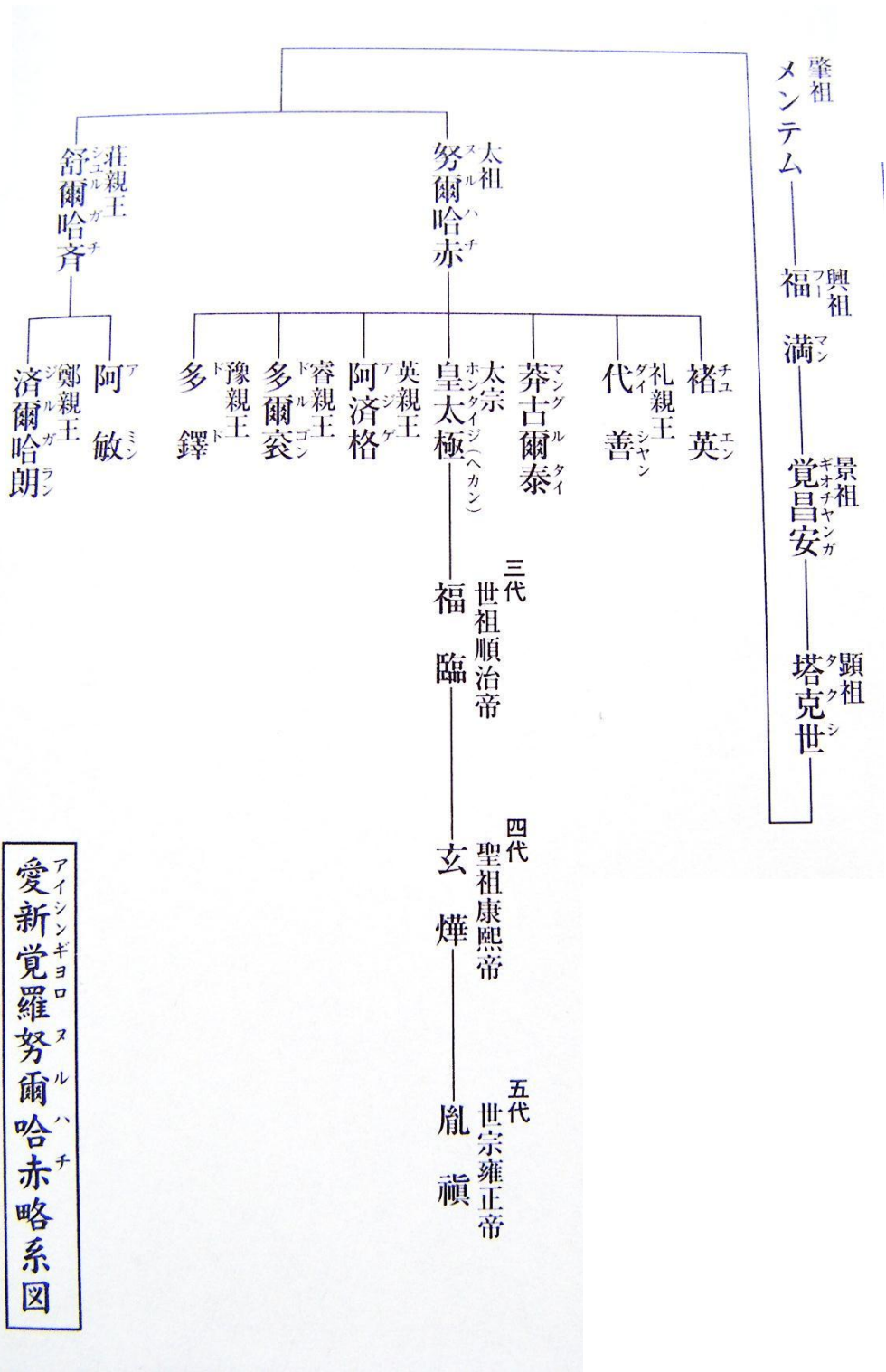
清の時代にはドイツやギリシャ、フランスからやってきた科学者や宣教師の力を借りて、機器を充実していった。

日時計で時間を測るもの、水時計、月の満ち欠け、星座の位置を探るものなどとりどりで、いまでも十分観測に耐えられる。

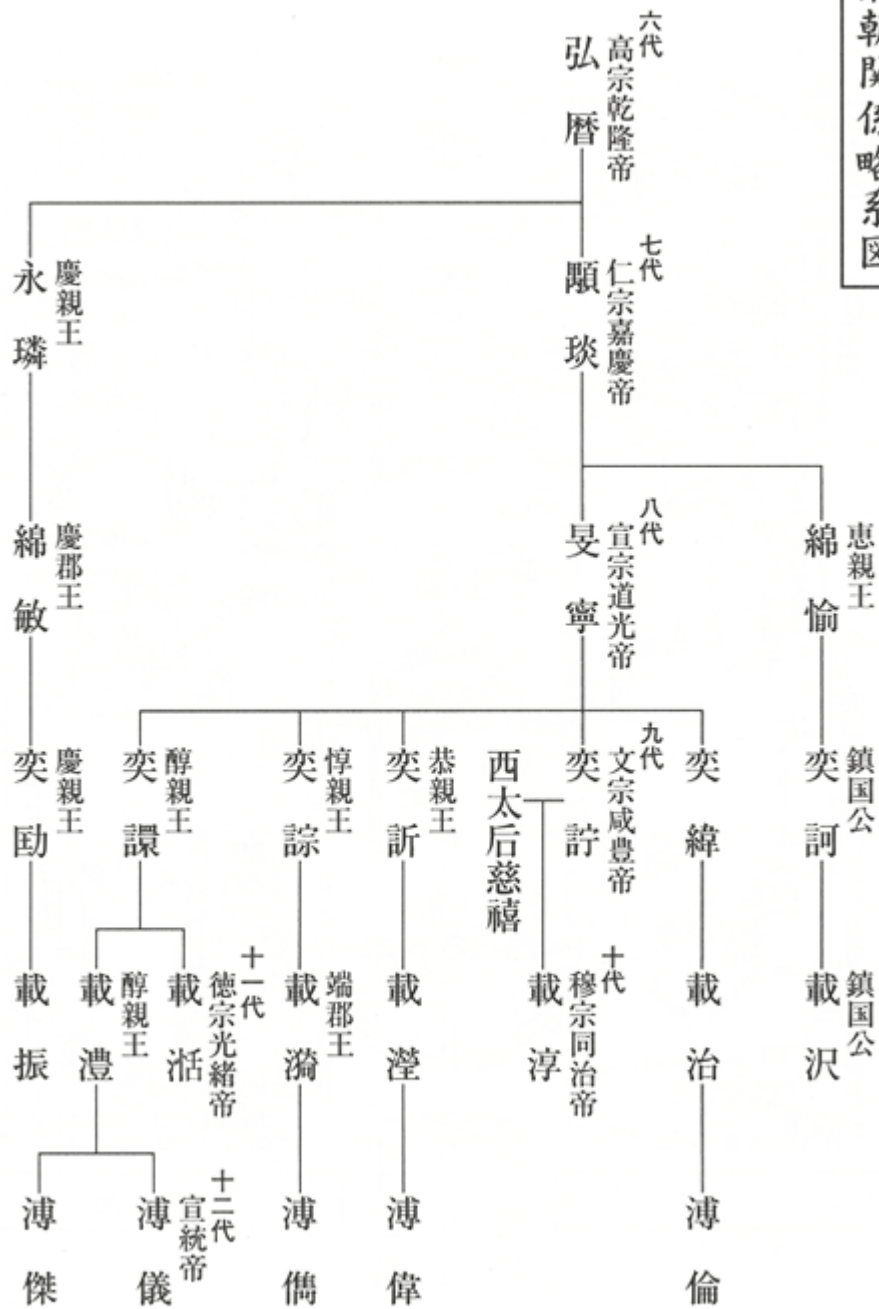
四合院の庭には、南京に移されている「渾儀」の複製品がある。

「渾儀」：太陽や星の動きを探るもの

清朝 歷代皇帝



清朝關係略系図



中国の歴史

神話伝説（三皇五帝）

黄河・長江文明

夏

殷

周 西周

東周 春秋

戦国

秦

漢 前漢

新

後漢

三国 魏 呉 蜀

晋 西晋

東晋 十六国

南北朝 宋 北魏

齊

梁 西魏 東魏

陳 北周 北齊

隋

唐

五代十国

宋 北宋 遼 西夏

南宋 金

元

明 北元

後金

清

満洲 中華民国

中華人民共和国 中華民国

清の勃興

17世紀初頭に明の支配下で、満洲に住む女直（以下「女真族」）の統一を進めたヌルハチ（努爾哈赤、太祖）が、1616年に明から独立して建国した後金国が清の前身である。この後、金国の建国と前後して、ヌルハチは満洲文字（無圈点文字）を制定し、八旗制を創始する等、満洲人が発展する為の基礎を築いていた。

1619年、ヌルハチがサルフの戦いで明軍を破ると、後金国の勢力圏は遼河の東方全域に及びに至った。

その子のホンタイジ（皇太極、太宗）は山海関以北の明の領土と南モンゴルを征服し、1636年に女真族、モンゴル人、漢人の代表が瀋陽に集まり大会議を開き、そこで元の末裔であるモンゴルのリンダン・ハーンの子から元の玉璽（後に作られた偽物である可能性が高いが）を譲られ、大清皇帝として即位するとともに、女真の民族名を満洲に改めた。

清の中国支配

順治帝のとき、中国では李自成の乱によって北京が攻略されて明が滅んだ。

清は明の遺臣で山海関の守将であった呉三桂の要請に応じ、万里の長城を越えて李自成を破った。

こうして1644年に清は首都を北京に遷し、中国支配を開始した（「清の入関」）。

しかし、中国南部には明の残党勢力（南明）が興り、特に鄭成功は台湾に拠って頑強な抵抗を繰り広げた。

清は、初め摂政王ドルゴン（ヌルハチの子）によって、のち成長した順治帝の親政によって、中国南部を平定し明の制度を取り入れて国制を整備した。

異民族である満洲族の支配を漢民族が比較的容易に受け入れた背景には、清が武力によって明の皇室に取って代わったとの姿勢をとらず、明を滅ぼした李自成を逆賊として討伐し、自殺に追いやられた崇禎帝の陵墓を整備するなど、あくまで明の後を継いだことを前面に出していた事が考えられる。

清の最盛期

康熙帝の時代の領土拡張順治帝に続く、康熙帝・雍正帝・乾隆帝の3代に清は最盛期を迎えた。

康熙帝は、即位後に起こった三藩の乱を鎮圧し、鄭氏の降伏を受け入れて台湾を併合し福建省に編入、清の中国支配を最終的に確立させた。

対外的にはロシアとネルチンスク条約を結んで東北部の国境を確定させ、北モンゴル、チベットを服属させた。

また、この頃新疆を根拠地としてオイラト系のジュンガル部が勃興していたが、康熙帝は北モンゴルに侵入したジュンガル部のガルダンを破った。

のち、乾隆帝はジュンガル部を滅ぼしてバルハシ湖にまでおよぶ東トルキスタンを支配下に置いた。

これによって黒竜江から新疆、チベットに及び現代の中国の領土がほぼ確定した。

こうして少数の満洲族が圧倒的に多い漢民族を始めとする多民族と広大な領土を支配することとなった清は、中国王朝の中でも特有の制度を築いた。

藩部と呼ばれた南北モンゴル・東トルキスタン・チベットでは土着の支配者が取り立てられて間接統治が引かれ、理藩院に管轄された。満洲族は八旗に編成され、軍事力を担った。また、皇帝が行幸で直轄する地域を訪れる際には漢民族の支配者として、藩部の支配地域に行く際にはゲルに寝泊りをしモンゴル服を着用するなど、ハーンとして振舞うことで関係を維持した。

重要な官職には漢族と同数の満洲族が採用されてバランスを取った。

雍正帝の時代には皇帝直属の最高諮問機関軍機処が置かれ、皇帝独裁の完成をみた。

18世紀の清が繁栄を極めたこの時代には文化事業も盛んで、特に康熙帝の康熙字典、雍正帝の古今圖書集成、乾隆帝の四庫全書の編纂は名高い。

一方で満洲族の髪型である辮髪を漢民族にも強制し（ただし新疆では逆）、文字の獄や禁書の制定を繰り返して異民族支配に反抗する人々を徹底的に弾圧した。

しかし、乾隆帝の60年に及び治世が終わりに近づくと、乾隆帝の奢侈と十度に及び大遠征の結果残された財政赤字が拡大し、官僚の腐敗も進んで清の繁栄にも陰りが見え始めた。乾隆帝、嘉慶帝の二帝に仕えた軍機大臣のヘシェンは、清朝で最も墮落した官僚の一人であり、乾隆帝の崩御後、親政を行おうとする嘉慶帝により自殺に追い込まれた。

ヨーロッパ列強の進出と内乱

19世紀の中国は、清の支配が衰え、繁栄が翳った時代である。

清朝は、大規模な社会動乱、経済停滞、食糧の供給を逼迫させる人口の爆発的増加などに苦しんでいた。

これらの理由に関しては様々な説明がなされるが、基本的な見解は、清は、この世紀の間ずっと、従来の官僚組織、経済システムでは対処しきれない人口問題と自然災害に直面したということである。

19世紀の中国にとっての主要な問題の一つはどのようにして外国と付き合うかということであった。

伝統的に、中国は東アジアにおいて覇権を握っており、中華思想に基づいて、歴代王朝の皇

帝が『天下』を支配し、冊封体制の下で東アジアの国際秩序を維持するものと考えていた。しかし、18世紀後半になると、ヨーロッパ諸国が産業革命と海運業によりアジアに進出していった。

イギリス商人は18世紀末にヨーロッパの対中国貿易競争に勝ち残って、中国の開港地広州で茶貿易を推進した。

1793年、イギリスは、広州一港に限られていた貿易の拡大を交渉するため、ジョージ3世が乾隆帝80歳を祝う使節団としてジョージ・マカートニーを派遣した。使節団は最新の工業製品や芸術品を皇帝に献上したが、清はヨーロッパの製品は必要とせず、ジョージ3世は自由に皇帝に敬意を表してよいという返答を得たのみであった。こうして対中輸出拡大を望むイギリスの試みは失敗に終わった。

この清の対応の結果、イギリスと清の貿易では、清の商人は銀での支払いのみを認めることとなった。

当時のイギリスは、茶、陶磁器、絹を清から大量に輸入していたが、中国に輸出する商品を欠いており、毎年大幅な貿易赤字となっていた。

これに対し、イギリスはアメリカ独立戦争の戦費調達や産業革命の資本蓄積のため、銀の国外流出を抑制する必要があり、インドの植民地で栽培した麻薬アヘンを中国に輸出することで三角貿易を成立させた。

清は1796年にアヘンの輸入を禁止したが、アヘン密貿易は年々拡大し、中国社会でのアヘンの蔓延は清朝政府にとって無視できないほどになった。

このため、1839年林則徐を欽差大臣に任命してアヘン密貿易の取り締まりを強化した。

林則徐は広州でイギリス商人からアヘンを没収して処分する強硬策を取ったが、アヘン密輸によって莫大な利益を得ていたイギリスはこの機会に武力でアヘン密貿易の維持と開国をさせる決意を固めて、翌1840年清国沿岸に侵入しアヘン戦争を起こした。

強力な近代兵器を持つイギリス軍に対しアヘンで墮落した清軍により敗北した清は、1842年イギリスと不平等な南京条約（およびそれに付随する虎門寨追加条約、五口通商章程）を締結した。

主な内容は、香港島の割譲や上海ら5港の開港、領事裁判権の承認、関税自主権の喪失、清がイギリス以外の国と締結した条約の内容がイギリスに結んだ条約の内容よりも有利ならば、イギリスに対してもその内容を与えることとする片務的最恵国待遇の承認であった（その後、1844年にフランスと黄埔条約を、アメリカと望厦条約を締結した）。

アヘンの密輸を含む対中輸出がこの後も伸び悩んだので、イギリスは1856年清の官憲が自称イギリス船アロー号の水夫を逮捕したのを口実に、1857年、第二次アヘン戦争（アロー戦争）を起こした。

イギリスは、宣教師が逮捕に遭った事を口実として出兵したフランスと共に広州・天津を制圧し、1858年にアヘンの輸入公認・公使の北京駐在・キリスト教布教の承認・内地河川の航行の承認・賠償、さらに「夷」字不使用などを認めさせる天津条約を締結した。

条約の批准が拒否されるとさらに北京を制圧し、批准のみならず天津ら11港の開港・イギリスに対する九龍半島南部の割譲を清に認めさせる北京条約を結んだ(1860年)。

これにより外国商品の中国市場流入が進んだ。

また、このときロシアにより、まずアイグン条約(1858年)で黒竜江将軍管轄区と吉林将軍管轄区のうちアムール川左岸を、さらに北京条約(1860年)で吉林将軍管轄区のうちウスリー川右岸を割譲させられ、ロシアはそこをアムール州(ru)、沿海州(ru)として編入し、プリアムール総督府(ロシア語)を設置した(外満洲)。

これは現在の中露国境線を形作るものである。

なお新疆についても1864年タルバガタイ条約(中国語)が結ばれイシク・クル、ザイサン湖以西をうしなった。

この戦争と同時期には、国内でも洪秀全率いる異端のキリスト教の信仰を紐帯とした組織・太平天国による太平天国の乱(1851年 - 1864年)、捻軍の反乱(1853年 - 1868年)、ムスリム(回族)によるパンゼーの乱(1856年 - 1873年)や回民蜂起(1862年 - 1877年)などが起こり、清朝の支配は危機に瀕した。

太平天国の乱の末、即位した同治帝の母西太后が政権を握ると、曾国藩・李鴻章ら太平天国の鎮圧に活躍した漢人官僚が力を得て、清朝の根幹の制度を維持したまま西洋の技術を導入する洋務運動を開始するに至った。

ウイグルでは、ヤクブ・ベクが清朝に反旗を翻したムスリムとむすび東トルキスタンを占領した(ヤクブ・ベクの乱)。

その混乱の中で、ロシアがカザフ族の完全な支配をねらい1871年東トルキスタンに派兵しイリ地方を占領した。

漢人官僚の陝甘総督左宗棠の努力により、ヤクブ・ベクの乱は鎮圧され、最終的には、曾国藩の息子である曾紀沢の手によって1881年にはロシアとの間で不平等なイリ条約を締結した。

条約にもとづきイリ界約でイリ地方のうちコルガス川以西はロシアが併合しセミレーチエ州に編入した。

さらにカシュガル条約でパミール高原より西をロシアに割譲し(外西北)、現在の中国と中央アジア諸国との国境線が形成されていった。

これに対し清は1884年新疆省を設置し、そこは旗人のイリ将軍らのみならず漢人の陝甘総督、甘肅新疆巡撫(中国語)もが管轄することとなり内地化された。

なお、さらにロシアは1892年にパミール高原に進攻しサリコル山(英語)以西を条約無

して併合している。

半植民地化・滅亡

まず 1854 年、冊封国暹羅が朝貢を廃止し勝手に開国した。

1872 年、日本の琉球処分により冊封国琉球を失った。

1884 年、インドシナ半島の植民地化を進めるフランスに対抗し対越南（ベトナム）宗主権を維持しようとして清仏戦争（ - 1885 年）が起きたが、清仏天津条約によって冊封国越南を失い、東アジアの覇者の地位が激しく揺らいだ。

1886 年、緬甸はイギリスにより英緬戦争で併合された。

清に対する従属を疑う者が擡頭した朝鮮に対しては宗主国として内政に干渉し、壬午事変（1882 年）、甲申政変（1884 年）を武力で粉砕したが、1894 年に日本が起こしたクーデター、甲午改革をもつぶそうとしたものの日清戦争（ - 1895 年）で敗北し、下関条約によって福建台湾省（中国語）割譲と朝鮮が自主国であることを承認させられ、建国以来もっていた冊封国朝鮮に対する影響力も失った（ただし朝鮮・大韓帝国における清領租界は日韓併合後も清国が確保している）。

「眠れる獅子」と恐れられた清が日本にあえなく敗北する様子を見た欧州列強は、日本が課した巨額の賠償金支払債務に目をつけて、1896 年から 1898 年にかけて勢力分割（いわゆる「瓜分」）を行い、満洲からモンゴル・トルキスタンをロシア、長江流域をイギリス、山東省をドイツ、広東省・広西省をフランスが勢力圏（英語）とした。

同じく、イギリスは九龍半島（香港総督管轄）と威海衛、フランスが広州湾、ドイツが青島（膠州湾租借地）、ロシアが旅順と大連（ダーリニー）（関東州、極東総督（ロシア語）管轄）を租借地として、それぞれ海軍基地を築いて東アジアの拠点とした。

しかもロシアは賄賂をもちい露清密約で東清鉄道附属地を手に入れた。

アメリカは南北戦争による国内の混乱から出遅れたため、中国市場は全ての国に平等に開かれるべきだとして、門戸開放宣言を発しつつ国際共同租界設置に参加した。

これに対し康有為・梁啓超ら若い知識人が日本の明治維新に倣って清も立憲君主制をとり国政の本格的な近代化を目指す変法自強運動を唱え始めた。

彼ら変法派は光緒帝と結んで 1898 年一時的に政権を奪取した（戊戌の変法）が、西太后率いる保守派の反撃に遭って打倒された（戊戌の政変）。

その後、西太后は愛新覚羅溥儀（保慶帝）を皇帝として擁立するも、保慶帝の父が義和団の指導者であるため強い反発を受け、3 日で廃された。

1899 年、反西洋・反キリスト教を掲げる義和団が蜂起し、「扶清滅洋」をスローガンに掲げて外国人を攻撃しつつ北京に進撃した。翌 1900 年西太后はこれに乗せられて列強に宣

戦布告したが、八カ国連合軍に北京を占領され、外国軍隊の北京駐留を認める北京議定書を結ばされた。こうして清の半植民地化はますます進んだ。

その後、義和団の乱の影響もあって清朝政府はついに近代化改革に踏み切り、1905年科挙を廃止し、六部を解体再編し、1908年欽定憲法大綱（中国語）を公布して憲法発布・議院開設を約束し、1911年5月には軍機処を廃止して内閣を置いた。

しかし、慶親王内閣が「皇族内閣」と批判され清朝は求心力を失い、漢民族の孫文らの革命勢力が中国などにおいて次第に清朝打倒運動を広げていた。

10月、漢民族による武昌での武装蜂起をきっかけに中国で辛亥革命が起こった。モンゴルにおいても、12月に外藩蒙古のなかから独立運動がおこった（モンゴル国）。ただしチベットにおいては英印軍の侵入と、独自の行動を見せたダライ・ラマ13世に対し、趙爾豊に命じてラサに駐留させ、チベットを確保している。清は完全な内部崩壊を迎えた。

翌1912年1月1日、中国の南京で中華民国が樹立された。清朝最後の皇帝、宣統帝（溥儀）は2月12日、正式に退位し、ここに清は276年の歴史に幕を閉じ、完全に滅亡した。

政治

清初期、康熙帝の治世までは未だ部族合議制的な制度が残り、完全な集権体制の皇帝というわけではなかった。

その象徴が議政王大臣会議（ぎせいおうだいじんかいぎ）と呼ばれる制度である。この制度は旗王（八旗の長）や皇族・宗族の有力者など実力者が選ばれて会議を行い、政治の方針を決めるものである。この中では皇帝も旗王の一人であり、無限の権力が振るえるわけではない。

それと平行して置かれていたものが明から引き継いだ内閣制度である。ホンタイジ時代には内三院と呼ばれており、行政機関の一つに過ぎず、議政王大臣会議の決定に従うものであった。

しかし漢文化を愛する順治帝により、内閣に名を改められて最高行政機関となり、議政王大臣会議は軍事を管轄するようになった。

その後、雍正帝は議政王大臣会議に権力を制限される事を嫌って、軍事・行政の両方を総攬する皇帝の諮問機関である軍機処を創設して完全なる皇帝独裁体制を整えた。軍機処に権限を奪われた議政王大臣会議は1792年に廃止される。

中央には軍機処の他に六部・内務府（宮廷諸事）・宗人府（皇族・宗族の事務）・理藩院（藩

部の統括。藩部については後述）・都察院（官僚の監察）・通政使司（上奏分の検閲）・大理寺（最高裁判所）がある。

地方は皇帝直属である省と藩部と満洲族の故地である満洲とに分かれている。

藩部はホンタイジが最初に南モンゴルのチャハル部を服属させた時に蒙古衙門（もうこがもん）を置いてモンゴルの統治に当たさせた事に始まる。

その後、蒙古衙門は理藩院と改名し、北モンゴル・新疆・チベット・青海を服属させると藩部と総称するようになった。

基本的に藩部には土民の旧制を維持し、行政官は当地の実力者をあてて半自治を行わせ、その上から理藩院が管轄するという形を取っている。

省はほぼ現在の中華人民共和国と同じものが置かれている。

直隸（河北省）・江蘇省・安徽省・山西省・山東省・河南省・陝西省・甘肅省・浙江省・江西省・湖北省・湖南省・四川省・福建省・広東省・広西省（広西チワン族自治区）・雲南省・貴州省の18である（いわゆる「一十八省」）。

しかし清末になるとその数が増えることになる。

省の下に府・州・県がある。府・州・県の長官はそれぞれ知府・知州・知県と呼ぶ。省の長官は巡撫と呼ばれ、またそれとは別に複数の省を統括する総督があり、双方が州の民政・軍事を司っていた。

満洲族の故地である満洲地方については省は置かずに、黒竜江将軍・吉林将軍・盛京将軍らに軍政を行わせて満洲族の軍事力を弱体化させないようにした。

またこの地に対する漢民族の移住を禁止して、満洲族が漢民族に同化してしまわないようにした。

しかし日露戦争後の1907年には黒竜江将軍を黒竜江行省、吉林将軍を吉林省、盛京将軍を奉天省とし、東三省総督を新設、しかも華北から大量の漢民族農民を移民させている。

満漢偶数官制

清の政治は圧倒的多数である漢民族を少数派である満洲族がどうやって統治していくかに気を配っていた。

その政策の主眼となるものが満漢偶数官制と呼ばれるものである。

中央の諸官のポストをそれぞれ満洲族・漢民族が同数になるように配置していく制度である。

清の官吏のポストはそれぞれ満官缺（満洲族だけが就ける。以下同様）・蒙官缺（モンゴル人）・漢軍官缺（八旗に所属する漢人）・漢官缺（八旗に所属しない漢人）と言う風に分けられていた。

地方の巡撫・総督は満漢半数であり、その下の知府以下は漢人が多く登用された。

兵制

兵制は満洲族の軍制である八旗制度を採用していた。

それを補完する形で緑営がある。緑営は明の兵制を解体した後に再編成したもので、各地に分散して配置された。しかし乾隆以降は長い平和に八旗は墮落し、物の役には立たなくなっていた。

その後白蓮教徒の乱・苗族の乱など国内での反乱が多発するようになると、郷勇という義勇兵が八旗に代わって活躍する。

反乱鎮圧後には郷勇は郷里へと帰るように命ぜられたが、中には流民が食うために兵士になったものも多く、それらの兵士達は緑営に編入されるか、そうでない者は盗賊化することもあった。

その後の太平天国の乱に際しては湘軍・淮軍といった有力者による半私兵集団が鎮圧に当たり、軍閥化が進むようになる。

これ以降の政府では曾国藩・李鴻章といった軍閥の長が権力を握るようになり、軍機処を始めとした中央の官僚の権限は有名無実化した。

清の経済

清の社会は基本的に明を引き継いでおり、明清帝国と呼ばれる事もある。

明代後期から出現した郷紳層による地方支配、外国産の銀の流通による経済の発達、東アジア交易網の隆盛などが明後期から清前期の特徴として挙げられる。

農業の発展と人口爆発

北宋代に 1 億を超えたと言われる人口は増減を繰り返し、康熙帝期の 1700 年に 1 億 5000 万、乾隆帝期の 1770 年から 1780 年にかけて 2 億 8000 万、19 世紀前半に 4 億を突破した（数字は全て推定）。

この人口の爆発的増加の最大の理由は新大陸原産の作物トウモロコシ・サツマイモ・落花生などが導入された事にある。

これらは水がそれほど豊富でなくとも育つ作物であり、それまで灌漑が不可能なるがゆえに見放されていた山地に漢民族が進出できるようになった。

溢れる人口は領内だけでは収めきれず、満洲・モンゴル・青海と言った本来漢民族の居住地ではない所にも進出し、牧草地や山地を農地に変えていった。

更に陸地だけでも収まり切らず、明代から出現していた華人が激増する事になる。

これらの漢民族の進出は多くの場合、現地の民族との摩擦を引き起こし、時に現地の民族の経済的没落を招く事になった。

これに不満を持ったモンゴル族・苗族などは何度か反乱を起こすが、数の圧力には逆らえず次第に勢力を減退させていった。

また鄭一族の降伏により版図に入った台湾にも数多くが進出し、開発が進む一方で原住民達は山間部に追いやられていった。

その中で清の故地である満洲は満洲族の保護の意味から漢民族の移住を禁止していたが、19世紀末になって、この地方にロシアの圧力がかかってくるようになると領土権の保持と防衛のために禁を解除し、この地も漢民族の農地が広がることになる。

税制

清初には税制も明から一条鞭法を引き継いでいたが地丁銀制に切り替えた。これはそれまでが人頭税（人丁）・土地税（地丁）の二本立てであった税を土地税一本にするものである。それまでは郷紳勢力には免税特権が与えられており、また人頭税逃れのために戸籍に登録しようとしぬ者も多く、これらの対策のために完全に土地による税制に切り替えたのである。

この制度が行われた後には隠す必要が無くなった人々が戸籍に登録されるようになり、前述の人口増加はこれが原因の一端と見られている。

それと共に戸籍制度もそれまでの里甲制から変えて、新しく作り直した。

商業

明代から引き続いて全国的に手工業が大いに盛んであり、絹織物・綿織物に加えて鉄の加工販売が盛んとなり、増大する人口と農地に必要な農具が大量に作られていた。

だが、清朝初期には海禁政策の影響で海外からの銀の流入が止まって、極端なデフレ状態に陥って「銀荒穀賤」と呼ばれて民衆は勿論、有力者の中にも破綻するものが相次いだ。

この傾向は鄭氏政権の崩壊によって海禁政策が緩和されるとともに落ち着くようになる。

そして商業も非常に活発となり、それに伴い商業システムの発展が随所に見られる。

典舗・当舗と呼ばれる質屋は貸付・預金業を行い、独自に銀と兌換が出来る銀票を発行した。

また為替業務を行う票号という機関もあった。これらの中心となっていたのが山西商人（山西省出身）・新安商人（安徽省出身）と呼ばれる商人の集団で、山西商人などは豊富な資金を背景に皇族とも密接に関わり、政府資金の運用にも関わっていたと言われる。

文化

順治帝は漢文化に傾倒したことで有名であり、康熙・雍正・乾隆の三世はいずれも類稀な文人でもある。

しかしその事は文化の保護に繋がらず、逆に弾圧に繋がった。異民族支配による文人達の反抗を抑えるために文字の獄と呼ばれる厳しい弾圧を行い、幾人もの文人が死罪になっている。

上記三世の皇帝は康熙期の『康熙字典』、乾隆期の『四庫全書』などの文化事業を行ったが、それは同時に政府の近くに文人達を集める事による言論統制の意味があった。

清の文化は越南に多大な影響を与えている。

思想

厳しい思想統制が行われる中で、考証学と呼ばれる新しい分野が生まれた。

これは聖人の教えを精釈して、忠実な思想を受け継ごうというものである。具体的にはそれまでの主観的に四書五経を読み解いている（と考えられる）朱子学や陽明学を批判して、過去の経書に遡って解釈を行うこととなる。

そして最も重視されたのが漢代のものである。

考証学では全ての経書に細密な考証が加えられ、その結果、孔子の子孫の家の壁から現れたと言う『古文尚書』が後に作られた偽作であると判明した。

このようにそれまで絶対視されてきた経書にも疑問が投げかけられ、儒教自体が相対化されることになる。

また史書・地理志にも考証学の技法が用いられて、それらの誤脱を見極めて正しい事柄を見極めようとした。

この分野では『二十二史劄記』の著者趙翼が有名である。

しかしこの分野は政府による文字の獄の中で次第に政府を刺激するような物は避けられるようになった。

確かに研究の上では非常に大きな成果をもたらしたが、技術のための技術へとなってしまい、純粋な学問となってしまったとの批判がある。

日本では学問が浮世離れしていてもごく普通に感じるかもしれないが、中国では学問とは何よりも政治のためのものであって、現実世界に寄与しない学問は無意味であるとの考え方が強い。

これらの批判を受けた学者達は『春秋公羊伝』を經典とした公羊学を行うようになる。

中国文学

清代に入り、それまでの中国的な文人像が相対化されたことでそれまではこれをしなければ文人にあらずと思われていた漢詩の分野もまた相対化されて、必ずしも必須のものではなくなった。

もちろん多数の作者により、多数の作品が作られており、全体的には高いレベルにあったが、しかし飛び抜けた天才・名作は無い。

一方、明代から引き継いで小説・戯曲の大衆文化は盛んであり、小説では『聊齋志異』『紅樓夢』、戯曲では『長生殿伝奇』『桃花扇伝奇』などが作られている。

それまでは俗と考えられていたこの分野もこの時代になるとそうは捉えられなくなり、官僚層の間でも小説を評価する動きが出てきた。

現代中国で普通話のもととなる北京語が成立したのも清代である。

本来北京周辺で話されていた言葉と東北部の語彙が混じり合ったものとなったため、北京語は他の方言とは異なる特徴を持つ言葉となった。

美術

絵画の分野ではイエズス会士ジュゼッペ・カスティリオーネによってもたらされた遠近法を取り入れた新しい絵画の誕生が見られる。

また明初の石濤、八大山人といった明の遺民たちは清に対する抵抗を絵に描き表した。

陶磁器の分野では景德鎮は陶磁器生産の大工場としての地位を保っており、明代から引き継いで赤絵・染付などの生産が行われた。

しかし乾隆以降はこれらは急速に下火になり、質的にも大きく劣ると評価される。

瀋陽にある清の旧王宮は北京と瀋陽の明・清王朝皇宮として世界遺産に登録されている。

国際関係

前期

清朝はすでに満洲時代にモンゴルの諸部族を併合し、朝鮮に朝貢させており、清軍が華南に進むにつれて琉球、マカオのポルトガル人、ベトナム（安南）が朝貢してきた。

また呉三桂が南明の永曆帝を追って雲南からビルマに入った。しかし三藩の乱や台湾鄭氏政権の抵抗のため、海上からの朝貢は鄭氏が投降するまで本格的に始まらなかった。

その後、広州などを開放して東南アジア諸国や英仏などの交易を許した。

特にタイのアユタヤ王朝は清朝の要請を受けて、タイ米を広東や福建に輸出した。

清朝は明朝と違い、厳格な海禁政策は取らなかった。

日本の江戸幕府は朝貢してこなかったのが外交関係はなかったが、中国商船の長崎貿易は許されていた。

欧州との関係についていえば、マカオ経由で入国したイエズス会員らカトリック宣教師が明末以来引き続き北京に滞在し、主に科学技術や芸術技能をもって朝廷に仕えていた。

北辺ではシベリアに進出したロシアがアムール川左岸に到達すると、ネルチンスク条約やキャフタ条約によって清露国境が定められ、ロシアは満洲から追放された。

しかし後にロシアはアムール川開発を目指して満洲に進攻することとなる。

後期

19世紀に入ると産業革命が進む欧米と中国との力関係が逆転し、特にナポレオン戦争後の世界の覇権を握ったイギリスを中心として中国侵略が開始され、後発のロシアや日本もこれに加わった。

その結果、アヘン戦争、アロー戦争によって不平等条約を結ばされ、外国商品の流入によって勃興しつつあった工場制手工業に大きな被害を受けた。

さらに清仏戦争、日清戦争、と相次ぐ戦争によって次々と冊封国を失い、冊封体制に基づく東アジアの伝統的な国際秩序は崩れた。

また義和団の乱が起こり、列強による勢力分割や主要な港湾の租借が行なわれ、半植民地化が進んだ。

その一方で朝鮮に対しては、1882年に壬午事変が起こると、漢城を占領したうえで、不平等条約である中朝商民水陸貿易章程をむすばせ、租界をもうけている。

下関条約後には中韓通商条約で対等条約がむすばれたものの、租界は手放さなかった。

① **ヌルハチ**(1559～1626)



姓はアイシンギョロ（愛新覺羅）、名はヌルハチ（努兒哈赤）。

追尊して清の初代太祖。タクシ（塔克世）の子。
建州女真のスクスフ部の首長の子として生まれる。

十九歳のとき、家を出て、明の将軍の李成梁に従い、才覚を認めらる。

万曆十一年(1583)、ヌルハチの祖父と父が、李成梁に従って戦ったが、明軍に誤殺された。

そのため建州左衛都指揮使を継いだ。

李成梁のはからいで明の左都督・龍虎将軍となる。

海西女真の内紛により力をつけ、万曆十七年(1589)には建州女真五部を統一。

その後、海西女真のハダ部・ホイファ部・ウラ部を次々と征服した。

万曆四十四年(1616)、ヘトゥアラでハーン位に就き、国号を大金とする（後金、アイシン・グルン）。

天命と建元し、軍事組織を八旗に編成した。

天命三年(1618)、七大恨を挙げて明朝にそむいた。

撫順の戦い、サルフの戦いで明軍に大勝し、海西女真最強のイエヘ部も平定した。

天命六年(1621)には瀋陽・遼陽を落とし、天命十年(1625)には瀋陽に遷都して盛京と改名した。

寧遠を攻撃して明の将軍の袁崇煥のために敗退し、そのとき受けた砲弾による負傷がもとで死去したという。

② ホンタイジ(1592～1643)



名は知られていない。通称はホンタイジ（皇太極）。
清の第二代太宗。在位 1626～1643。
太祖ヌルハチの八男。

はじめ正白旗の旗主たる貝勒（ベイレ）となり、ダイ
シャン（代善）・アミン（阿敏）・マングルタイ（莽古
爾泰）と並ぶ四大貝勒の末席を占めた。
兵を率いて征戦におもむき、しばしば戦功があった。

天命十一年(1626)、ヌルハチが没すると、後金のハー
ン位を継いだ。

明制にならって三院・六部・都察院・理藩院を設けた。

来帰した漢人武将やモンゴル諸王の軍によって自己の軍事力を強化し、三大貝勒の権力を抑制した。

漢人官僚を登用し、人材と文化の吸収につとめ、漢土統治の基礎を築いた。

また八旗の軍制を拡大して、蒙古八旗・漢軍八旗を新たに編成した。

天聰九年(1635)、チャハル部を逐って内モンゴルを平定し、大元伝国の璽を入手し、朝鮮を従属させた。

女真の称を満洲に改めた。翌年四月、大清皇帝の位につき、国号を大清（清、ダイチン・グルン）と改め、崇徳と改元した。

崇徳五年(1640)、松錦の戦いで明軍主力に大打撃を与えた。

明朝打倒をめざし、山海関に迫ったが、関を越えることなく翌年に没した。

③ 順治帝(1638～1661)



福臨。清の三代順治帝。廟号は世祖。法名は行痴。号は痴道人、太和主人。在位 1643～1661。太宗（ホンタイジ）の九男。

崇徳八年(1643)、太宗が崩зると、帝位についた。叔父の鄭親王ジルガラシ・睿親王ドルゴンを輔政王とし、国政を総理させた。

順治元年(1644)、呉三桂の先導により清軍が入関して北京を落とすと、北京に遷都した。

ドルゴンが独裁を確立し、帝はその傀儡となった。このころ薙髪令を出して、漢人に弁髪を強要した。

二年(1645)、予親王ドドに南征させて揚州を屠り、南京を落とした。

福建に朱聿鍵を殺し、広州に朱聿鏞を滅ぼした。

八年(1651)、ドルゴンが病没すると、帝は親政を開始し、ドルゴンの生前の罪を問うてその官爵を剥奪し、英親王アジゲを自殺させた。

漢人官僚を重用し、吏治を整え、開墾を奨励し、『賦役全書』を編纂させた。

西南に呉三桂を派遣して南明の永暦政権を討たせた。

帝ははじめキリスト教を信じて、アダム・シャルルを尊崇した。

のちに仏教に傾倒し、高僧の玉林琇・木陳忞らを尊んだ。

十七年(1660)、愛妃の棟鄂氏が病死すると、出家しようとしたが、群臣に止められた。

翌年、病のため養心殿で崩じた。

④ 康熙帝(1654~1722)



清の四代康熙帝。廟号は聖祖。在位 1661~1722。
順治帝（福臨）の三男。順治十八年(1661)、八歳で即位。

翌年には南明最後の永曆帝を昆明で処刑し、康熙三年(1664)には大順軍（李自成）の残党も一掃した。

八年(1669)、後見者のオーバイ（鰲拜）を罷免して親政をはじめた。

十二年(1673)に三藩の乱が起こると、これを九年がかりで鎮圧した。

海上では鄭氏海軍を破り、台湾を占領。

二十八年(1689)、北方のロシアとネルチンスク条約を結んで、和平した。
三度にわたって西北に親征して、ジュンガル部のガルダンを逐った。

運河交通や黄河の治水に意を用いて治績をあげ、六回にわたって江南への巡幸をおこなった。
文字の獄によって思想統制をおこなう一方、『全唐詩』『佩文韻府』『康熙字典』『大清会典』『古今圖書集成』などを編纂させた。

西洋の技術や自然科学にも造詣が深く、フェルビーストラを用いて暦法を制定させた。
皇太子允禔を四十七年(1708)に廃し、まもなく再び立て、また廃した。
後継者をめぐる諸子の間の争闘は激しくなり、帝は皇太子の選択に悩んで、太子密建を創始した。

六十一年(1722)、病のため暢春園で崩じた。一説に四男の胤禛（雍正帝）に毒殺されたともいう。

康熙年間も清代でも乾隆年間とならぶ盛時とされ、康熙帝は中国の歴代王朝を通じて有数の名君とされる。

⑤ 雍正帝(1678~1735)



清の五代雍正帝。廟号は世宗。在位 1722~1735。康熙帝（胤禛）の四男。康熙三十七年(1698)に貝勒に封ぜられ、四十八年(1709)に晋雍親王となった。

熾烈な後継者争いに勝ち抜き、六十一年(1722)に即位した。

軍機処をもうけて、内閣に代わる国政の最高機関とした。土地税と人頭税を一本化して、税収を安定化させた。

対外的には青海・チベットを征服し、露とキャフタ条約を結んで国境線と貿易関係を確定した。

施政は厳格で、近臣や弟であっても処刑・処罰をおこなったという。

為政者の義務を果たすために一日四時間しか眠らず、全国の官僚に内密の上奏文を提出させて、地方政治を監督する独特の「奏摺政治」を展開した。

中国の独裁君主の典型とされており、その評価は褒貶二分されている。

清西陵

⑥ 乾隆帝(1711～1799)



清の六代乾隆帝。廟号は高宗。

十回の遠征に成功したため、十全老人と号したという。

在位 1735～1795。雍正帝（胤禛）の四男。

雍正十一年(1733)、和碩宝親王に封ぜられた。

十三年(1735)、雍正帝が崩ずると、帝位についた。

即位後、ジュンガル部のガルダン・ツェレンを討ち、大小ホージャの乱を平定して新疆をおさめた。

チベットを安定させるため、「欽定西藏章程」を公布して民政・軍事の権力を駐蔵大臣に委ねた。

また雲南、ビルマ、台湾などに遠征し、これによって清朝の最大版図を形成した。

寧波・廈門・雲台山を閉港し、西洋との交易を広州一港に制限した。

英国の使節マカートニーの通商の要求もことごとく拒否した。

文化面では『四庫全書』を編纂させ、一代のうちに完成させた。

また多くの文化財を蒐集して紫禁城に集めた。

しばしば巡遊をおこない、馬上朝廷の称もあった。

土木工事を好み、多くの人力財力を消費した。

帝個人はさまざまな濫費を好んだが、かれの治世は銀の入超に支えられて、前代に類をみない好景気の時代であり、清朝の最盛期であった。

在位六十年で退位して嘉慶帝に譲り、太上皇帝となった。

その後の三年間、院政を布いた。晩年は和珅を信任して国政が乱れ、白蓮教の乱が起こった。

『楽善堂詩文全集』。

⑦ 嘉慶帝(1760~1820)



清の七代嘉慶帝。廟号は仁宗。在位 1796~1820。
乾隆帝（弘曆）の十五男。乾隆五十四年(1789)、嘉親
王に封ぜられた。

六十年(1795)、皇太子に立てられた。

翌年、父帝に譲られて帝位についた。父が太上皇とな
り引き続き執政し、和珅が国政を専断した。

嘉慶四年(1799)、父太上皇が崩すると、親政をはじめ
た。和珅を逮捕して獄に下し、二十大罪を数えて、自
殺を迫った。

湖北・四川で起こった白蓮教徒の叛乱は五省に波及し、
足かけ九年この鎮圧のために全力を尽くした。

まもなく蔡牽・朱潰の乱が東南海上で起こり、北方で天理教の乱が起こって京師に迫った。

乾隆中期以後、軍紀はゆるみ、軍費は増大し、官僚の汚職はきわまり、連年にわたって黄河
が氾濫し、運河の交通も滞って、財政は悪化の一途をたどった。

貿易収支も悪化して、嘉慶期には銀の出超となり、デフレによる賦税の実質増によって農民
を苦しめた。

二十五年(1820)、熱河の避暑山荘で崩じた。

⑧ 道光帝(1782～1850)



清の八代道光帝。廟号は宣宗。在位 1820～1850。
嘉慶帝の次男。

嘉慶二十五年(1820)八月、帝位についた。

道光六年(1826)、ジハーンギールがカシュガル・ヤルカンドを占領し、台湾では黄文淵が乱を起こした。

このころ、天災や政治腐敗や重税が重なり、農民の叛乱や少数民族の反抗が相次いだ。

十八年(1838)、林則徐を欽差大臣に任じて広東におもむかせ、アヘンの吸引と販売を厳禁させた。

二十年(1840)、イギリスがアヘン戦争をしかけ、舟山島の定海を占領した。

のちに英軍は、広州虎門の砲台を激戦の末落とし、鎮海・寧波・乍浦を陥落させ、南京を攻撃した。

二十二年(1842)、和平派の耆英が欽差大臣となって、英との間に南京条約が結ばれ、香港の割譲、五港の開港、賠償金の支払いが約された。

二十四年(1844)、米との間に望厦条約が、仏との間に黄埔条約が結ばれて、治外法権を認めさせられた。

三十年(1850)、病のため崩じた。

清西陵

⑨ 咸豊帝(1831～1861)



清の九代咸豊帝。廟号は文宗。在位 1850～1861。
道光帝（旻寧）の四男。
道光三十年(1850)、道光帝が崩ずると、帝位についた。

咸豊元年(1851)、太平天国の乱鎮圧のため兵を派遣したが、たびたび敗北した。

三年(1853)、曾国藩ら漢族の郷紳を起用して団練を編成させ、蕭順らを任用して財政を改革させた。

六年(1856)、英仏がアロー戦争を仕掛けると、対外妥協的態度を取った。

八年(1858)、露との間にアイグン条約を結び、英仏米露との間にそれぞれ天津条約を結んだ。

十年(1860)、英仏軍が北京に侵攻したため、帝は熱河に逃れた。

弟の恭親王奕訢に京師の留守を任せて英仏と折衝させ、北京条約を結ばせた。

十一年(1861)、病のため熱河の行宮で崩じた。

⑩ 同治帝(1856～1875)



清の十代同治帝。廟号は穆宗。在位 1861～1875。
咸豊帝（奕訢）の長男。咸豊十一年(1861)、六歳で帝位についた。

蕭順ら八大臣が補佐し、祺祥と改元した。

西太后や恭親王奕訢が政変を起こして権力を握ると、同治と改元した。

東太后（慈安太后）西太后（慈禧太后）が垂簾聽政にあたるという形式を取ったが、実質は西太后が権力を握った。

かれの治世に太平天国の乱が鎮圧され、洋務運動が起こって諸改革が試みられた。

同治十二年(1873)正月、親政を開始したが、なお西太后の専権下にあった。
翌年、病のため崩じた。

西太后

清の咸豊帝妃で、同治帝の母。

清末期の権力者。満州・旗人（鑲藍旗人）の葉赫那拉（エホナラ、イエヘ＝ナラ）氏の出身。慈禧太后（じきたいこう）。老仏爺（ラオフオイエ）

中国語では「慈禧太后（Cixi Taihou ツーシー・タイホウ）」ないし「那拉皇太后」、「西太后（Xi Taihou シータイホウ）」。

紫禁城内における2人の皇太後の住む場所によって東太后（皇后・鈕祜祿（ニウフル）氏。慈安皇太后、母后皇太后）、西太后（第2夫人。慈禧皇太后、聖母皇太后）と区別して呼ばれた。

生涯

西太後の出生地は不明で、安徽省蕪湖説、内モンゴルのフフホト説、山西省長治説など諸説があるが、近年の学界では北京出生説が有力とされる。

西太後の父親だった恵徴は、清朝の中堅官僚で、最終官職は安徽寧池太広道の「道員」だった。

恵徴は1853年、安徽省の赴任先で太平天国の乱に巻き込まれ、その心労により同年六月三日（7月8日）に鎮江で病死した。

1852年、数え17歳のとき、3年ごとに紫禁城で行われる后妃選定面接試験「選秀女」を受けて合格。翌年の五月九日（6月26日）、18歳で咸豊帝の後宮に入って「蘭貴人」となった。

後に「蘭」から「懿」に徽号を変えており、貴人から懿嬪に進んだ。

ちなみに皇后は、咸豊帝の皇子時代から仕えていた鈕祜祿氏（のちの東太后）であった。1856年、咸豊帝の長男（愛新覺羅載淳。咸豊帝の唯一の男子）を生み、その功績により、懿貴妃に昇進した。

政権掌握

アロー戦争により熱河に逃れた咸豊帝は1861年に崩御した。

咸豊帝死後の政治の実権をめぐり、載淳の生母である懿貴妃と咸豊帝の遺命を受け載淳の後見となった8人の「顧命大臣」載垣、端華、肅順らは激しく争った。

懿貴妃は皇后鈕祜祿氏と咸豊帝の弟で当時北京で外国との折衝に当たっていた恭親王奕訢を味方に引き入れた。

そして咸豊帝の棺を熱河から北京へ運ぶ途上でクーデターを発動し載垣、端華、肅順らを処刑（辛酉政変：1861年）し権力を掌握した。

北京帰還後載淳は同治帝として即位し、皇后鈕祜祿氏は慈安皇太后、懿貴妃は慈禧皇太后となったが、慈安太后は紫禁城の東の宮殿に住んだため東太后、慈禧太后は西の宮殿に住んだため西太后と呼ばれた。

当初は東太后と西太后が同治帝の後見として垂簾聴政を行い、恭親王が議政王大臣として政治を補佐するという三頭政治であったが、東太后は政治に関心がなく、実質的には西太后と恭親王の二頭政治であった。

1874年同治帝は大婚を機に親政を行おうとしたが若くして崩御した。

この時代にも、西太后はそりの合わない皇后（嘉順皇后、後に幽閉され死亡した）と皇帝を無理矢理離間する等、依然として権力を握っていた。

同治帝の死因は天然痘、梅毒のいずれか解明されていないが、一説に同治帝は天橋の売春宿へ通うようになり、そこで感染したという説がある。

現代中国では天然痘か梅毒か、学者の間でも意見が分かれているが、日本では天然痘によるものであるとされている。

同治帝は子供を残さずに死去したため、後継問題が持ち上がった。

通常、皇位継承は同世代間では行わないことになっている。

この場合名前に「載」の字がある世代は、皇帝候補者とはなり得ない。

しかし、自身の権力低下を恐れた西太后は、その通例を破り、他の皇帝候補者よりも血縁の近い妹の子（父は醇親王奕譞）載湉（さいてん）を光緒帝として即位させた。

そして再度東太后と共に垂簾聴政を行い、権力の中枢に居続けた。

1881年、45歳の東太后が突然死去した。

公式発表は病死であった。民間はもとより清朝高官にも公然と懐疑を表した者は多いが、脳卒中と考えられている。

また1884年、清仏戦争敗北の事後処理に際し、開戦に危惧を表明していた宗室の実力者恭親王奕訢へ責任を被せ、失脚させた。

東太后の死去と恭親王の失脚により、西太后は清朝において絶対的な地位を確立した。

1887年光緒帝の成年に伴い、3年間の「訓政」という形で政治の後見を行う事を条件に、光緒帝の親政が始まる。

1888年には自身の姪を光緒帝の皇后（のちの隆裕皇太后）に推挙している。

日清戦争以後

光緒帝の即位以降、西太后は宮廷内政治に手腕を発揮する一方、表の政治においては洋務運動を推進する曾国藩、李鴻章、左宗棠、張之洞ら洋務派官僚を登用した。

洋務運動がある程度の成果を上げて清朝の威信が回復した期間は同治中興と呼ばれる。

しかし洋務運動は 1895 年の日清戦争により挫折する。

清朝の敗北は北洋艦隊の予算を西太后肝いりの頤和園再建へ流用していたためであるという説が古くから伝わっているが、証拠はなく真偽のほどは不明である。

1890 年代前半の北洋艦隊の予算の不足については、満洲周辺におけるロシアの脅威に備えるために陸軍に経費を充当したという可能性や、多くの海軍費を広東水師（海軍）の増強の方に充てたという点も指摘されている。

日清戦争の敗北により、技術的な改革にすぎない洋務運動ではなく、体制的な改革を主張する変法運動がまきおこった。

変法派に共感する光緒帝は明治維新にならって政治制度も変革すべきと主張した変法派の康有為・梁啓超を登用して、1898 年に体制の抜本改革を宣言した。

これを戊戌の変法（別名戊戌維新、変法自強運動、百日維新）という。

西太后は当初は改革の推移を見守っていたが、改革に好意的と見られていた袁世凱が変法派を裏切り、変法派が進めていた西太后幽閉計画を密告したことにより、西太后はこれに先んじてクーデターを仕掛けることを決意。

変法派の主要メンバーを処刑し、さらに光緒帝を拘束して中南海の瀛台（エイダイ）に幽閉し、三度目の垂簾聴政を開始した（戊戌の政変）。

この結果、康有為や梁啓超といったリーダー格は日本へ亡命したが、康有為の弟や譚嗣同を含む 6 人が処刑された。

彼らを「戊戌六君子」という。わずか 3 か月あまりで西太后は権力の座に返り咲いたことになる。

義和団の乱

1900 年に義和団の乱が発生。

義和団は「扶清滅洋」を標語に掲げ、当初国内にいる外国人やキリスト教徒を次々と襲った。清朝内には義和団を支持し、この機会に一気に諸外国の干渉を排除しようとする主戦派と、義和団を暴徒と見做し、外国との衝突を避ける為討伐すべきという和平派が激しく対立した。義和団は勢力が拡大するに連れ暴徒化、無差別な略奪を繰り返すようになるが、清朝内部では次第に主戦派が優勢となり野放しとなった。

ついにはドイツ公使や日本公使館員が殺害されるという事態になり、諸外国は居留民保護のため連合軍を派遣。

当初義和団を優勢と見た西太后は主戦派の意見に賛同し、諸外国に対して「宣戦布告」した。西太后はこのとき「中国の積弱はすでに極まり。恃むところはただ人心のみ」と述べたという。

しかし、八ヶ国連合軍が北京へ迫ると、西太后は側近を伴い北京を脱出、西安まで落ち延びた。

この際、光緒帝の側室珍妃を紫禁城内の井戸へ投げ捨てるよう命じた。

義和団の乱の処理を命じられた李鴻章と慶親王奕劻は、諸外国に多額の賠償金と北京への外

国軍隊駐留を認める代わりに、清朝の責任は事件の直接首謀者のみの処罰ですませ、西太后の責任が追及されないようにした。

そのため西太后は 1902 年に北京に帰還し、これまで通り政治の実権を握り続けることができた。

義和団の乱終結以後、遅まきながら民衆・知識人の間に起こる政治改革機運の高まりを察知した西太后は、かつて自らが失敗させた戊戌変法を基本に、諸所の配慮（中央に於ける立法権の未付与、責任内閣制の阻止）を加えた、いわゆる「光緒新政」を開始した。

1905 年には 5 人の大臣を日本と欧米に派遣し政治制度を視察させたが、李鴻章ら五大臣の奏摺した「中央の上級官吏を政務にも参与させ議院の基礎とする旨、また地方の名望家を政務に参与させ地方自治の基礎とする旨、責任内閣制の準備及び冗官整理を含めた新官制、併せて立憲の準備とする旨」の奏摺を保留、1906 年に官制の変更(冗官の廃止統合と地方官制の追認)と 9 年後の立憲制への移行を宣言する「預備立憲」上諭を下した。

1908 年光緒帝が崩御した翌日、西太后も 72 歳で崩御した。

西太后は死の前に溥儀を宣統帝として擁立し、溥儀の父醇親王を摂政王に任命して政治の実権を委ねた。

しかし、西太后の死からわずか 3 年あまりで清朝は辛亥革命によって倒されてしまう。

光緒帝毒殺説

西太后と光緒帝の死亡時期が近いこと、自分の最期を悟った西太后が光緒帝を自分よりも長生きさせないために毒薬投与により暗殺したという説がある。

2008 年 11 月の報道によると、光緒帝の遺体の科学鑑定が行われ、同時代の光緒帝の皇后隆裕太后の遺体と比較した結果、光緒帝の遺体からは高濃度の砒素が検出され、毒殺説の可能性が高まった。

しかし、誰が犯人かを示す証拠は何も発見されていない。

光緒帝殺害の犯人としては古くから多くの説が唱えられているが、真相は不明である。

主なものとしては西太后説、袁世凱説、李蓮英説、その他人物説などがある。

⑪ 光緒帝(1871～1908)



清の十一代光緒帝。廟号は徳宗。在位 1875～1908。
道光帝の第7子醇親王の第2子として生まれる。母は
西太后の妹。

同治帝が早世した後に権力保持を狙う西太后によって
擁立された。

即位したのは3歳の時であり、実権は西太后が握って
いた。

光緒十五年(1889)から親政したが、西太后に実権を握
られて、対立を深めた。

日清戦争後は革新思想に傾斜。

光緒二十四年(1898)四月、康有為や梁啓超らと図って戊戌の変法を断行したが、保守派の
反撃を受けて、わずか百日で失敗した。

その後、西太后によって瀛台に幽閉された。

翌年に義和団事件が起こり、二十六年(1900)に義和団が北京に入って外国公使館などを襲
撃すると、八カ国連合軍が天津を占領して北京に迫った。

帝は西太后らとともに西安に逃れた。

翌年、辛丑条約が成立すると北京に帰った。

三十四年(1908)、西太后の死の少し前に病没した。毒殺説もある。

后妃

孝定景皇后

西太后の子桂祥の娘で、西太后の姪にあたる。

選秀女に参加して入選し、1889年に光緒帝の皇后に立てられる。

西太后と光緒帝が対立したため、光緒帝に疎まれ夫婦仲はよくなかったという。

溥儀が宣統帝として即位すると嫡母となり、隆裕皇太后と徽号される。

辛亥革命では清朝内部で主戦派と和平派の論争が起きるが、最終的には隆裕皇太后が和平派に傾き、皇帝退位の決断をした。

そのため民国時代には、古代に禅譲した帝王にたとえられ、「女の中の堯舜」と呼ばれた。

1913年に死去した際には民国政府から国葬級の待遇を受け、多くの民国政府の官僚が西陵まで参列した。

諡号は孝定景皇后。西陵の崇陵に光緒帝とともに葬られている。

端康皇貴妃

他他拉氏の長叙の娘。

妹とともに選秀女に参加して入選。瑾嬪となり後に瑾妃に進む。

妹珍妃が西太后の怒りにふれたため、一時期貴人に落とされるが、後に瑾妃に復帰。

溥儀が即位すると皇考瑾貴妃と尊称された。

民国年間には端康皇貴妃の徽号が送られた。

いわゆる四太妃の1人。

隆裕皇太后の死後は、実家が袁世凱に賄賂を贈ったために四太妃のなかで主導的地位につき、紫禁城の奥向きを取り仕切った。

溥儀の『わが半生』によると、少年時代の溥儀の生活に干渉したため煙たい存在だったようだ。1924年死去。諡は温靖皇貴妃。

恪順皇貴妃

他他拉氏の長叙の娘で瑾妃の妹。

姉とともに選秀女に参加して入選。珍嬪となり後に珍妃に進む。

光緒帝に最も寵愛された妃という。

一時期、西太后の怒りにふれ、政治に口出しをし賄賂を受け取って官職を売ったとして貴人に落とされるが、後に珍妃に復帰。

戊戌政変では再び西太后の怒りにふれ、紫禁城内の一室に幽閉される。

義和団の乱で8ヶ国連合軍が北京占領した際、西太后らとともに西へ逃げることを拒否したため西太后の怒りにふれ、宦官に井戸に突き落とされて殺害された。

翌年西太后らが北京に戻るとようやく井戸から引き上げられて葬儀が行われ、恪順皇貴妃の諡号が送られた。

清朝の公式発表では、8ヶ国連合軍が迫り節を守るために自殺したとされている。

瑾妃、珍妃姉妹の墓は西陵の崇陵の妃園寝にある。

⑫ 宣統帝(1906～1967)



清の十二代宣統帝。ラスト・エンペラー。在位 1908～1912。

醇親王載灃の長男。母は栄禄の娘。

光緒帝（載湉）が崩ずると、西太后の意向により、三歳で即位。

父の醇親王が後見した。

宣統三年(1911)に辛亥革命が起こると、翌年に革命派と妥協した袁世凱によって退位させられた。

宣統帝の号は保持しながらも、紫禁城に軟禁された。

1917年、張勳の復辟運動によってわずか十二日間の復位。

1924年、直隸派の馮玉祥によって紫禁城を追われ、北京の日本公使館に避難。翌年、天津の日本租界に移った。

1932年には日本の保護のもと満洲国の執政となり、1934年満洲国皇帝となった。康德と建元。しかし、完全な日本の傀儡であった。在位中、二度訪日。

1945年、日本降伏後に退位を宣言。日本に亡命する途中、ソ連に逮捕された。

1950年、中華人民共和国に引き渡され、撫順・ハルビンの刑務所に服役した。1959年、特赦で出所。一平民となり、植物園の庭師となった。看護婦をしていた婦人と結婚した。

1964年、政治協商会議委員をつとめる。歴史学会会員。文革の初期に病死した。『わが半生』

宣統帝

ラストエンペラー

第 12 代清朝皇帝

1900 年に発生した義和団の乱を乗り越え、当時依然として強い権力を持っていた西太后が 1908 年に光緒帝の後継者として溥儀を指名したことにより、溥儀はわずか 2 歳 10 か月で皇帝に即位させられ、清朝の第 12 代・宣統帝となった。

西太后は溥儀を後継者とするとともに、溥儀の父・醇親王を監国摂政王に任命して政治の実権を委ね、同年 11 月 14 日に光緒帝が崩御した翌日に 74 歳で崩御した。

清朝崩壊と退位

袁世凱は、清国政府による民間資本鉄道の国有化とその反対運動をきっかけに 1911 年 10 月 10 日に辛亥革命が勃発すると、湖北省の武昌で起きた反乱（武昌起義）の鎮圧を名目に政界に復帰した。

袁世凱は清国政府に第 2 代内閣総理大臣の地位を要求するとともに、醇親王の摂政王退位を要求した。

反乱鎮圧のために袁世凱の武力に頼らなければならない清朝政府は袁世凱の要求を受け入れたが、袁世凱はさらに、孫文らと溥儀を退位させる代わりに自らが中華民国臨時大總統に就任するという裏取引をし、隆裕太后に溥儀の退位を迫り、隆裕太后は皇族を集めて連日御前会議を開いた。

その席上肅親王善耆、恭親王溥偉などは退位に激しく反対したが、清朝皇族が頼りとしていた日本の陸軍士官学校留学生で皇族出身の良弼が暗殺されるという事態におよび、隆裕太后はついに皇帝退位を決断し、1912 年 2 月に溥儀は退位することとなった。

なお、肅親王は日本租借地の旅順へ、恭親王はドイツの租借地の青島に逃れてその後も清朝復辟運動を行った。

溥儀の皇帝退位にあたり、清朝政府と中華民国政府との間に「清帝退位優待条件」が締結された。優待条件は、皇帝は退位後も『大清皇帝』の尊号を保持し、民国政府はこれを外国元首と同等に礼遇すること。

溥儀が引き続き紫禁城（と頤和園）で生活すること。

中華民国政府が清朝皇室に対して毎年 400 万両を支払い、清朝の陵墓を永久に保護すること。

などが取り決められた。そのため溥儀は退位後も紫禁城で宦官らと皇帝としての生活を続けた。またこの頃、弟の溥傑と初対面を果たした。

袁世凱の皇帝即位

その後、袁世凱は溥儀に代わり自らが皇帝となるべく奔走し、1915 年 12 月 12 日に帝政復活を宣言して皇帝に即位した。

その後、1916年1月1日より年号を洪憲と定め、国号を「中華帝国」に改めた。だが、北洋軍閥や日本政府などの各方面からの反対により即位直後の同年3月に退位し、失意の中で同年6月に死去した。

張勳復辟事件

袁世凱が死去した翌年の1917年に、対ドイツ問題で黎元洪大総統と政敵の段祺瑞の確執が激化し、同年5月23日には黎元洪が段祺瑞を罷免に追い込んだものの、民国期になっても辮髪を止めないほどの保守派で、革命後も清朝に忠節を尽す張勳が、この政治的空白時に乗じて王政復古によって政権を奪還しようと、中華民国の立憲君主制を目指す康有為を呼び寄せて、すでに退位していた溥儀を再び即位させて7月1日に帝政の復古を宣言。いわゆる「張勳復辟事件」に発展した。

張勳は幼少の溥儀を擁して自ら議政大臣と直隸総督兼北洋大臣となり、国会及び憲法を破棄し、共和制廃止と清朝の復辟を成し遂げるも、仲間割れから段祺瑞に敗れオランダ公使館に避難。

最終的に溥儀の復辟は13日間で挫折した。その後中国大陸は馮玉祥や蔣介石、張作霖などの軍閥による勢力争いという、混沌とした状況を迎えることとなる。

ジョンストンとの出会い

その後、溥儀の後見役的立場になっていた醇親王載灃と、西太后の側近であった李鴻章の息子で、清国の欽差全権大臣を務め、駐イギリス特命全権大使でもあった李經方の勧めによって、近代的な西洋風の教育と併せて英語の教育を受けることを目的に、1919年5月にイギリス拓務省の官僚で、中国語に堪能であったスコットランド人のレジナルド・ジョンストンを帝師（家庭教師）として紫禁城内に招聘した。

溥儀は当初、見ず知らずの外国人であるジョンストンを受け入れることを拒否していたものの、ジョンストンとの初対面時にその語学力と博学ぶりに感心し、一転して受け入れることを決断した。

なおジョンストンは紫禁城外の後門付近に居住し、自動車で通勤した。

結婚時の溥儀

その後ジョンストンより日々教育をうける中で、洋服や自転車、電話や英語雑誌などのヨーロッパの最新の輸入品を与えられ、「洋服には似合わない」との理由で辮髪を切るなど、紫禁城内で生活をしながらも、ジョンストンがもたらしたヨーロッパ（イギリス）風の生活様式と思想の影響を受けることとなる。

なおこの頃溥儀はキリスト教徒（プロテスタント）のジョンストンより、「ヘンリー（Henry）」というイングリッシュ・ネームを与えられ、その後もこの名前を好んで使用した。

なお溥儀はイングリッシュ・ネームを持ったものの、イングリッシュ・ネームを持つ多くの中国人と同じくキリスト教徒にはならなかった上、この名前は欧米人に対してのみ使用し、決して公式の場で使用したり、中国人に対しては使用しなかった。

結婚

その後の 1922 年 11 月には、満洲旗人でダフル族の郭布羅氏・婉容を皇后として、蒙古旗人の鄂爾徳特氏・文繡を淑妃として迎え、紫禁城において盛大な結婚式を挙げる。

なお溥儀は「時代遅れの慣習である」として淑妃を迎えることに反対したものの、側近らの勧めで 1 人だけ迎えることに同意した。

またこの際には中国の皇帝として初めて外国人を招待した「歓迎会」を催した。

なお、結婚後に婉容の家庭教師として北京生まれのアメリカ人イザベル・イングラムが就任し、婉容にはイングラムより「エリザベス (Elizabeth)」のイングリッシュ・ネームが与えられた。

またこの頃自分用の自動車を手に入れた他、イギリスやアメリカへの留学を画策するものの、実現することはなかった。

改革

この頃、溥儀は中華民国内の混沌とした政情の中にあっただものの、正妻とジョンストンらの側近、宦官らとともに紫禁城の中で平穏な日々を過ごしていたが、清国の大阪総領事や総理衙門章京、湖南布政使等を歴任した後の 1924 年に総理内務府大臣（教育掛）となった鄭孝胥の薦めを受けて、紫禁城内の経費削減と近代化を推し進めた。

同年 6 月には、美術品が多く置かれている紫禁城内の「建福院」の目録一覧を作成し、宦官による美術品の横領を一掃することを目論んだものの、目録作成直後の 6 月 27 日未明に一部の宦官らが「建福院」に放火し、横領の証拠隠滅を図った。

これに激怒した溥儀は中華民国政府の力を借りて約 1,200 名いた宦官のほとんどを一斉解雇し、国民やマスコミから称賛をうけた。

またその後も女官を追放するなど、紫禁城内の経費削減と近代化を推し進め議論を呼んだ。

紫禁城追放と日本への接近

その後も中国の武力統一を図る軍閥同士の戦闘はますます活発化し、1924 年 10 月には馮玉祥と孫岳が起こした第二次奉直戦争に伴うクーデター（北京政変）が発生し、直隸派の曹錕が監禁され馮玉祥と孫岳が北京を支配することとなった。

さらに馮玉祥と孫岳は政変後に、帝号を廃し清室優待条件の一方的な清算を通達し、溥儀とその側近らを紫禁城から強制的に退去させた。

当初溥儀は醇親王の王宮である北府へ一時的に身を寄せ、その後ジョンストンが総理内務府

大臣の鄭孝胥と陳宝琛の意向を受けて上海租界や天津租界内のイギリス公館やオランダ公館に庇護を申し出たものの、ジョンストンの母国であるイギリス公館からは内政干渉となることを恐れ受け入れを拒否された。

しかし、かつて関東大震災の義捐金などを通じて溥儀と顔見知りであった日本の芳沢公使は即座に受け入れを表明し、溥儀ら一行は 11 月 29 日に北京の日本公使館に入り、日本政府による庇護を受けることになった。

翌 1925 年 2 月には鄭孝胥と日本の支那駐屯軍、駐天津日本国総領事館の仲介で、溥儀一行の身柄の受け入れを表明した日本政府の勧めにより天津市の日本租界の張園に移ることとなる。

なおこの事は、1905 年の日露戦争の勝利によるロシア権益の移譲以降、満洲への本格進出の機会を狙っていた日本陸軍（関東軍）と溥儀がその後緊密な関係を持ち始めるきっかけとなるものの、この頃の日本政府及び日本陸軍の立場は、あくまでジョンストンの申し出を受けて溥儀を一時的に租界内に庇護するだけであり、溥儀との関係を積極的に利用する意思はなかったばかりか、中華民国および満洲に強い影響力を持っていた溥儀の扱いに困惑していた。

ジョンストンとの別れと再会

溥儀が清室優待条件を失ったことを受けて同年に帝師を辞任したジョンストンは、天津港より P&O の汽船でイギリスに帰国した。

しかしジョンストンは、溥儀と別れた 2 年後に 1927 年にイギリスの租借領であるポート・エドワード（威海衛）の植民地行政長官（弁務官）に就任することとなり再び中華民国へと戻ることとなり、1930 年 10 月に威海衛がイギリスから中華民国へ返還されるまでこの地に駐在した。

イギリスに帰国したジョンストンは、その知識、経験と語学力を生かしてロンドン大学の東洋学及び中国語教授に就任し、1931 年に太平洋会議への出席のために再び中華民国を訪れた際に溥儀と再会する。

その後 1934 年に、溥儀の家庭教師時代から溥儀の満洲国「元首」（執政）までの動向を綴った「紫禁城の黄昏」（原題：『Twilight in the Forbidden City』）を著し（なお同書は溥儀に捧げられている）、翌 1935 年には満洲国を訪れ「執政」となった溥儀と再会するなど、生涯を通じて溥儀との交流は続いた。

国共内戦と東陵事件

なお、この頃も中華民国国内の政治的状況は混沌としたままで、1927 年 4 月には「上海

クーデター」が勃発し、蒋介石率いる中国国民党右派が対立する中国共産党を弾圧した。その後、蒋介石は南京にて「南京国民政府」を設立し、党および中華民国政府の実権を掌握するものの、同年 7 月に国共合作を破棄したことで、ソビエト連邦からの支援を受けた中国共産党の残党が反発し国共内戦がはじまる。

また、溥儀を紫禁城から追放するきっかけとなった北京政変後の 1926 年に政権を掌握した張作霖の政権も磐石なものではなかった。

張作霖は、孫文の没後にその後を継いだ中国国民党右派の蒋介石が 1928 年に開始した北伐により、からくも北京より脱出したものの、同年 6 月、乗っていた列車を関東軍に爆破されて死亡した（張作霖爆殺事件）。

その後張作霖の息子の張学良は蒋介石に降伏し、その後両者は相通じて関東軍に対し挑発行動を繰り返すこととなる。

このような政治的混乱のなかで、1928 年に国民党の軍閥孫殿英の軍隊が河北省の東陵を略奪するという事件が発生した（東陵事件）。

なかでも乾隆帝の裕陵と西太后の定東陵は墓室を暴かれて徹底的な略奪を受けた。

溥儀は国民政府に抗議したが、孫殿英は国民党の高官に賄賂を贈っていたためになんら処罰されることはなく、溥儀を大いに憤慨させた。

東陵事件は溥儀にとって紫禁城を退去させられた時以上に衝撃的な事件であり、これによって清朝復辟の念を一層強くしたという。

文繡との離婚

溥儀の住んでいた日本租界のある天津は、この頃の国共内戦の主な戦闘地域から離れていたことや、日本やイギリス、フランスなどの列強をはじめとする外国租界が多かったため、両軍が租界を持つ諸外国に刺激を与えることを恐れたこと、さらに張作霖爆殺事件以降、急速に関東軍の支配が強まっていたこともあり、国共内戦の影響を受けることはなかった。

引き続き日本政府は溥儀の扱いに苦慮していたものの、このような状況下で溥儀を自国の租界から追い出すわけにもいかないため、溥儀はその後天津の日本租界の張園、後に移転した協昌里の静園に留まり、婉容と文繡、そして鄭孝胥をはじめとする紫禁城時代からの少数の側近らとともに静かに暮らしていた。

しかし、正妻の婉容との確執が深まった側室の文繡と別居後 1931 年に離婚し、中国の歴史上初の離婚歴を持つ皇帝となる。

離婚後文繡は溥儀に対して慰謝料を求めて告訴した上で、溥儀の性癖や家庭内および宮廷内の内情をマスコミに暴露する。

この事を受けて文繡は離婚後すべての位を剥奪され平民となり、小学校の教師として 1950 年に死亡する。

満洲事変

1931年9月18日、満洲に展開する関東軍を含む日本陸軍が、中華民国の奉天郊外の柳条湖で発生した南満洲鉄道の線路の爆破事件を、「張学良ら東北軍による破壊工作」と断定し（いわゆる「柳条湖事件」）関東軍は満洲を根城にしていた張学良軍との間の戦い、いわゆる「満洲事変」を開始した。

すぐさま関東軍は奉天や長春、営口などの近隣都市を占領したばかりか、その後21日に、林銑十郎中将の率いる朝鮮駐屯軍が独断で越境し満洲地域一帯に侵攻した。さらに関東軍は、軍司令官本庄繁を押し切ったばかりか、不拡大方針を進めようとした日本政府、日本陸軍の決定を無視して、「自衛のため」と称して戦線を拡大する。

その後関東軍はわずか5ヶ月の間に全満洲地域を占領したが、張学良は蒋介石率いる中華民国政府の指示により、まとまった抵抗をせずに満洲地域から撤退し、間もなく満洲一帯は関東軍の支配下に入った。

満洲国建国と清朝復辟の画策

関東軍は国際世論の批判を避けるため、満洲地域に対して永続的な武力占領や植民地化ではなく、日本の影響力を残した国家の樹立を目論み、親日的な軍閥による共和国の設立を画策した。

しかしこの様な形での新たな共和国の設立は、中華民国のみならず、中国大陸に多くの租界と利権を持つイギリスやアメリカ・フランスそして国際連盟加盟国をはじめとする国際社会の支持を得にくいと判断したことから、国家に正統性を持たせるために、清朝の皇帝で満洲族出身であり、北京政変による紫禁城追放以降日本租界へ身を寄せていた溥儀を元首に擁いた君主制国家を設立することを画策した。

この様な目論みを受けて、関東軍の特務機関長であった土肥原賢二が溥儀の説得にかかるために天津へ向かい、その後溥儀と会談し「満洲国元首」就任の提案を行った。

かねてから「清朝の復辟」を熱望していた上、東陵事件後にその思いを強くした溥儀は、土肥原による満洲国元首就任の提案を受けて、清朝の復辟を条件に満洲国執政への就任に同意した。

その後溥儀は、天津の自宅を出て湯崗子温泉を経て11月13日に営口に到着、旅順の南満洲州鉄道が経営するヤマトホテルに留まった。

なお溥儀が旅順へ向かった後、肅親王善耆の第14王女で、「東洋のマタ・ハリ」、「男装の麗人」と呼ばれ、当時関東軍に協力していた川島芳子が、天津に残された婉容を連れ出すことを関東軍から依頼され、実際に婉容を天津から旅順へ護送する任務を行っている。

この様な溥儀の行動に対して、宋子文ら中華民国の有力者が、当時太平洋会議のために中華民国に滞在していたジョンストンに対し溥儀の決定を翻させるように働きかけるように依頼した他、中華国内のマスコミも溥儀の動きを憂慮したものの、東陵事件における蒋介石や張学良の反応に失望していた上、清朝の復辟を強く望んでいた溥儀は、これらの中華民国の有力者による反対意見を退け、関東軍の提案を受け入れることとなった。

満洲国執政就

その後、関東軍は遼寧（当時は奉天省）・吉林・黒竜江省の要人との協議を開始し、1932年2月18日に、後に満洲国の國務院総理となる張景恵を委員長とする東北行政委員会が、蒋介石率いる中華民国政府からの分離独立を宣言し、その後、東北行政委員会の委員を中心に内閣を編成した。

なお溥儀は、その後に満洲国の元首に就任することが決定していたにも拘らず、この満洲国建国に至る関東軍との協議に参加しなかったばかりか、協議の概要さえも伝えられることはなかった。

大同元年（1932年）3月1日に、張景恵の公邸で満洲国建国宣言が行われ、満洲国に在住する主な民族による「五族協和（日本人・漢人・朝鮮人・満洲人・蒙古人）」を掲げ、新京に首都を置く満洲国が建国され、満洲国の建国を受け溥儀は同年3月9日に満洲国の「執政」に就任した。

この際に溥儀は、かつて皇帝であったこともあり、格下である執政への就任を嫌がり、あくまで皇帝への即位を主張するが、関東軍から「時期尚早」として撥ねつけられてしまう。なお、執政となった溥儀は、関東軍の日本人将校から、皇帝へ対する敬称である「陛下」ではなく、執政に対する呼び方である「閣下」と呼ばれ激怒したと伝えられている。

なお、溥儀が執政に就任した直後の3月に、国際連盟から柳条湖事件及び満洲事変と満洲国、および日本と中華民国の調査のために派遣されたイギリスの第2代リットン伯爵ヴィクター・ブルワー＝リットン率いる、いわゆる「リットン調査団」が満洲国を訪問し、5月には溥儀にも調査の一環として謁見した。

この時期、関東軍参謀長だった小磯國昭（後の日本国内閣総理大臣）に対し、中原への進出を企図して関東軍の支援を求め、達成後は日本に満洲を割譲するとまで言ったが小磯に諫められている。

皇帝即位

その後、溥儀は1934年3月1日に満洲国皇帝の座に就き、康德帝となる。

なお、溥儀の皇帝即位に併せて国名も満洲帝国と呼ばれることが多くなった。

元号も「康德」に変更された（満洲国側によって当初は「啓運」を予定していたが、関東軍の干渉によって変更を余儀なくされた）。

また、同時に紫禁城時代からの教育掛で総理内務府大臣でもあり、溥儀と日本陸軍との間を取り持った鄭孝胥が國務院総理に就任した。

なお、同日に新京市内で行われた皇帝即位式の際に溥儀は、満洲国のスローガンの 1 つである「五族協和」を掲げる上で、満洲族の民族色を出すことを嫌った関東軍からの強い勧めで満洲国軍の軍服（大総帥服）着用で行われたが、溥儀の強い依頼により、新京市内の順天広場に置かれた特設会場にて、即位式に先立って即位を清朝の先祖に報告する儀式である「告天礼」が行われ、この際に溥儀は満洲族の民族衣装である龍袍を着用した。しかし同時に満洲国政府からは「これは清朝の復辟を意味しない」旨の声明が出されていた。

溥儀の皇宮は執政当時と同様に満洲国の首都の新京（現在の長春）中心部に置かれた。当初溥儀夫妻は内廷の緝熙楼（しゅうきろう）に住んでいたが、「皇宮とするには狭く威厳が足りない」と考えた満洲国政府により、1938 年に新たに同徳殿が皇宮として建てられた。

しかし、関東軍による盗聴を恐れて溥儀自身は一度も皇宮として利用しなかった。

傀儡

関東軍の主導によって作られた満洲国の憲法上では、皇帝は國務院総理を始めとする大臣を任命することができたが、次官以下の官僚に対しては「日満議定書」により、関東軍が日本人を満洲国の官吏に任命、もしくは罷免する権限を持っていたので、関東軍の同意がなければ任命することができなかった。

実際に、関東軍の高級将校で「御用掛」である吉岡安直や工藤忠が常に溥儀とともに行動し、その行動や発言に対し「助言」するなど、皇帝の称号こそあるにしろ、事実上関東軍の「傀儡」と言えるような状況であった。

また、国政に関わるような重要事項の決定には、皇帝の溥儀だけでなく関東軍の認証が必要であり、また満洲国の官職の約半分が日本人で占められ、建国当初は満洲国独自の軍隊や国籍法が存在しないことなど、関東軍の影響力は大きかった。

1937 年 2 月には、溥儀と関東軍の植田謙吉司令官の間で念書が交わされ、「満洲国皇帝に男子が居ない場合、日本の天皇の叡慮によりそれを定める」とされ、実際に溥儀に男子がいなかったことから、事実上溥儀の後継者は日本（関東軍）が定めることとなった。

これ以降溥儀は、以前に比べて関東軍による暗殺（と溥儀の暗殺による親日本的な志向を持つ皇帝への交代）を恐れるようになって行ったと言われている。

また、溥儀は 1937 年に満洲旗人他他拉氏出身の譚玉齡を側室として迎え祥貴人としたが、譚玉齡は 1942 年に死去し、溥儀はこの死について「関東軍による毒殺」と疑い、東京裁判においてもそのように証言している。

しかし遺族はそれを戦後否定しており、実際に単なる病死であったと証明されている。
なお譚玉齡の死後は漢族の李玉琴を側室として迎え福貴人とした。

1940年7月に溥儀が2度目の訪日を行い伊勢神宮を訪れた後には、溥儀の発案で満洲国帝宮内に「建国神廟」が作られ、神体として天照大神が祀られた。

なお、満洲国建国に際しても溥儀と一緒に満洲入りし、満洲国の初代国務院総理として溥儀を支えた鄭孝胥は「我が国はいつまでも子供ではない」と、建国後も実権を握る関東軍を批判する発言を行ったことから、溥儀の皇帝即位のわずか1年後の1935年5月に辞任に追い込まれた。

このような関東軍が過度に介入する形での満洲国の運営、さらに実権を伴わない形での溥儀の皇帝就任に対しては日本国内からの反発も多かった。

一例として、当時の政界に強い影響力を持っていたアジア主義者の巨頭で玄洋社の総帥の頭山満は、満洲国の建国当時の日本政府と関東軍の過剰な介入に憂慮を示し、1935年に溥儀が来日した際に招待を受けたものの、「気が進まない」との理由でこれを断わっている。

日本皇室との関係

満洲国において関東軍との関係はこの様な状況ではあったものの、日満友好を促進する狙いと、満洲国並びに溥儀の威信を国内外に高めることを目的として、1935年4月に溥儀が昭和天皇の招待により日本を国賓として公式訪問する。

この時、大日本帝国海軍の練習戦艦「比叡」が、御召艦として使用された。

両国の深い関係を表すように、溥儀が初訪日した際には昭和天皇自らが東京駅まで溥儀を迎えに行くという、日本の歴史上無い異例の歓待を行なった（同様の歓待は現在に至るまで他に行われたことがない）。

また、溥儀の初の訪日を記念して日本政府は記念切手を4種発行したほか、訪日中は新聞やラジオ、雑誌やニュース映画など日本中のマスコミが溥儀の行動や発言を逐一報道し、いわゆる「追っかけ」も発生するなど、溥儀自身の人柄もあいまって日本の皇室や指導者層のみならず日本国民からも高い人気を集めた。

また、皇太后節子は溥儀を「満洲殿」と呼び、我が子のように接した他、多くの皇族が訪日した溥儀を温かく迎えた。

1940年6月に皇紀2600年記念行事が東京で行われた際にも、タイ王国や南京国民政府（汪兆銘政府）などの日本の友好国の首脳陣同様に奉祝のために再び訪日し、満洲国から横浜港に到着した際に高松宮宣仁親王の出迎えを受けた後、再度昭和天皇と会見するなど国を挙げての歓待を受けた。

なお溥儀は、1935年と1940年の2回の訪日ともに、この頃よりアヘン中毒などいくつ

かの病気が伝えられた婉容を同伴せず単独で訪日を行った。

なお当時の溥儀は、年齢が近い（昭和天皇の方が 5 歳年長）上に自分と同じ君主制国家の国家元首であった昭和天皇の「兄弟分」であるという気持ちが強かったとされている。また、溥儀が初来日から帰国した際には「もし大満洲帝国皇帝に不忠であれば、それは大日本帝国天皇に不忠であり、日本天皇に不忠であれば満洲皇帝に不忠となる」と満洲国政府首脳部に対して訓示を行った他、2 度目の訪日の際に伊勢神宮を訪問した際には「日滿一神一崇」を表明するなど、大満洲帝国皇帝としての自らの地位を強固にする為日本国の皇室との親しい関係を表明していた。

溥傑と嵯峨浩の結婚

1937 年には、当時日本の陸軍士官学校を卒業し千葉県に住んでいた溥傑と、嵯峨侯爵家の令嬢で天皇家の親戚（先代侯爵嵯峨公勝の夫人仲子は、明治天皇の生母の中山慶子の実弟、忠光の娘）に当たる嵯峨浩の縁談が関東軍の主導で進められ、1938 年 2 月 6 日に駐日満洲国大使館の発表で 2 人の結婚が内定し、同年 4 月 3 日に東京の軍人会館（現・九段会館）で挙式が行われ大きな話題を呼んだ。

当初溥儀は嵯峨浩のことを「関東軍のスパイ」かと疑ってかかったものの、その後 2 人の間に子供が生まれたことや、溥傑と嵯峨浩の関係が良好なことを受けて嵯峨浩に対する警戒を少しずつ解いて行ったと言われている。

日中戦争（支那事変）と第二次世界大戦

溥儀が皇帝に就任した 4 年後の 1937 年 7 月 7 日に、北京西南の盧溝橋で起きた盧溝橋事件を契機として日本軍と中華民国軍の間で日中戦争（支那事変）が勃発した。その後、中華国内において内戦状態にあった国民党と共産党は、日本軍に対抗するための抗日民族統一戦線である国共合作（第二次国共合作）を構築した。

その後の 1941 年 12 月 7 日の太平洋戦争（大東亜戦争）の開戦により、日本がイギリスやアメリカ、オランダやオーストラリアなどの連合国と交戦状態に入ると、満洲国も日本に併せて連合国各国に対し宣戦布告をし、事実上枢軸国の一員として第二次世界大戦に参戦することとなった。

しかし、日本軍とイギリス軍やアメリカ軍、中華民国軍との戦闘地域から離れていることや、満洲国の事実上の宗主国である日本と隣国ソビエト連邦との間に日ソ中立条約が存在することから、満洲国内は中華民国軍や中国共産党軍によるゲリラ攻撃がたびたび行われていたものの、戦争状態にはならず平静が続いた。

1943 年には溥傑が日本の陸軍大学校に教官として配属されたため、溥傑とその一家は東京に居を移すこととなった。

この頃、日本軍はまだ各地で勢いを保っていたものの、事実上 1 国だけでイギリスやアメリカ、中華民国やオーストラリアなど複数国からなる連合国と対峙していた上、国力を超えて戦線が拡大していたこともあり、1944 年の秋に入ると各地で次第に敗戦の色を濃くしてゆく。

なお、同年溥儀は学習院に入学した長女の慧生を東京に残し、妻や次女・孀生と新京に戻った。

その後も主な戦場から遠く離れた満洲国内は平静を保ったものの、多くの関東軍が南方戦線へ移動すると同時に、多くの食料が食糧難になってきていた日本に輸出されるようになっていく。

さらに 1945 年に入ると、工業地帯や軍の基地などが、イギリス領インド帝国経由で中華民国内陸部の成都基地から飛来したアメリカ軍の爆撃機などの攻撃をたびたび受け、これらの爆撃機と満洲国軍の戦闘機との空中戦が行われるなど、少しずつ戦火の影響を受けるようになってゆく。

満洲国崩壊と退位

進軍するソ連軍その後 1945 年 8 月 8 日に、先立って行われたヤルタ会議でのイギリスやアメリカなどのほかの連合国との密約により、ソ連政府はモスクワに終戦仲介依頼に来ていた佐藤尚武駐ソ連日本特命全権大使に対して、1946 年 4 月 26 日まで有効だった日ソ中立条約の一方的な破棄を突如通告し、まもなくソ連軍の大部隊が北西の外蒙古（現在のモンゴル）および北東の沿海州、北の孫呉方面及びハイラル方面の 3 方向からソ満国境を越えて、ソ連が国家として承認していなかった（「日本の傀儡国家で、事実上の植民地」とみなしていた）満洲国に侵攻した。

日ソ中立条約の存在に頼り 1942 年以降増強が中止され、主力を 1943 年後半以降劣勢となっていた南方戦線にとられていた関東軍は、1945 年 5 月のドイツの敗北以降、対日侵攻に備えてヨーロッパ戦線から転進しソ満国境付近に集結していたソ連軍に対して、各部隊が分断され反撃もできないままに潰滅し、居留民の保護もままならず敗走を続けた。

溥儀やその家族、満洲国の閣僚や関東軍の上層部たちは、ソ連軍の進撃が進むと 8 月 10 日に首都の新京の放棄を決定し、8 月 13 日に日本領の朝鮮との国境に程近い通化省臨江県の大栗子に、南満洲鉄道の特別列車で避難していた。

しかし、事実上 1 国で連合国と戦っていた日本が 8 月 15 日に連合国に対して降伏したことにより、その 2 日後の 8 月 17 日に国務院が満洲国の解体を決定、8 月 18 日未明に大栗子で満洲国の消滅を自ら宣言するとともに、満洲国皇帝を退位した。

ソ連への抑留

満洲帝国皇帝を退位した溥儀は、日本政府より日本への亡命を打診されたこともあり、 8

月 19 日朝に満洲軍の輸送機で大栗子から奉天へ向かい、奉天の飛行場で岐阜基地から京城、平壤経由で送られてくる日本陸軍の救援機（四式重爆撃機）を待機していた。

しかし同日昼に、日本陸軍の救援機の到着に先立ち奉天に進軍して来たソ連軍の空挺部隊に捕らえられた。

その後溥儀や溥傑・毓嶠及び吉岡ら満洲帝国宮中一行は直ちにソ連領内に移送され、さらにソ連極東部のチタとハバロフスクの強制収容所に収監された。

なおその後溥儀ら一行の身柄はソ連に留め置かれ、中華民国に引き渡されることはなかった。

婉容の死

なお、婉容や浩は溥儀や溥傑の航空機による日本への亡命に同行できず、地上での移動を余儀なくされた末に、わずかな親族や従者と共に満洲国内に取り残され、侵攻して来た中国共産党軍に捕らえられた。

さらに大戦終結後に国共内戦がはじまり、中国共産党軍が中国国民党軍に追われる中で各地を転々連れまわされ、通化では通化事件に巻き込まれることとなった。

逃亡中にアヘン中毒の禁断症状が出た婉容は、その後嵯峨浩などの親族や従者と引き離され、吉林省延吉の監獄内でアヘン中毒の禁断症状と栄養失調のために、誰にも看取られることも無いままに死亡したといわれる。

東京裁判

ソ連の強制収容所に収監された翌年の 1946 年に開廷した極東国際軍事裁判（東京裁判）には、証人として連合国側から指名され、ソ連の監視下において空路東京へ護送され、同年 8 月 16 日よりソ連側の証人としてソ連に有利な証言を強要された。

その際、板垣征四郎（当時は大佐）から「本庄繁司令官の命令として満洲国における領軸になって欲しい」、という依頼があった事を証言し、「自分の立場は日本の傀儡以外何ものでもない」と主張した。

収監

その後の 1950 年には、ソ連と同じく連合国の 1 国であった中華民国ではなく、国共内戦にソ連の援助を受けて勝利した中国共産党によって前年に中国大陸に樹立された中華人民共和国へ身柄を移された。

その後、裁判で裁かれる事すらないままに、第二次世界大戦当時には存在すらしていなかった同国の「戦犯」として、撫順の政治犯収容所（「戦犯管理所」と称される）に弟の溥傑や同じくソ連軍にとらえられた満洲国の閣僚や軍の上層部 61 人、さらに 1,000 人を超える日本軍の捕虜らとともに収監され、「再教育（中国共産党による共産主義の洗脳教育）」を受けることとなった。

その後同年 10 月にハルビンの政治犯収容所に移動させられ、1954 年には再び撫順の政治犯収容所に移動させられた。

政治犯収容所に収監中の 1957 年 12 月 10 日に、かつて可愛がっていた溥儀の長女の慧生が、学習院の同級生の大久保武道と静岡県伊豆市内で自殺した事件(天城山心中)を知り、悲しんでいたことを日記内に記している。

一市民へ

周恩来 1959 年 12 月 4 日に、当時の劉少奇国家主席の出した「戦争犯罪人」に対する特赦令を受け、12 月 9 日に模範囚として特赦された。

なお、溥儀とともに収容所に収監されていた溥傑も、1960 年 11 月 20 日に釈放された。

釈放後の 1960 年 1 月 26 日に、溥儀が政治犯収容所に収監されている際も溥儀に対して何かと便宜を図っていた周恩来首相と中南海で会談し、釈放後の将来について話し合った結果、一般市民の生活に慣れることを目的に、周恩来の薦めで中国科学院が運営する北京植物園での庭師としての勤務を行うこととなった。

その後は政協第 4 期全国政治協商会議文史研究委員会専門委員になり文史資料研究を行う。

溥儀はその後、1962 年に看護婦をしていた一般人の李淑賢と再婚した。

その記録は、「わが夫、溥儀、李淑賢 著」によって知ることができる。

政治協商会議全国委員

全国政治協商会議文史研究委員会専門委員として文史資料研究活動を行う傍ら、1964 年には、多民族国家となった中華人民共和国内において、満洲族と漢族の民族間の調和を目指す周恩来の計らいで、満洲族の代表として中国人民政治協商会議全国委員に選出された。

なお、毛沢東や多くの共産党幹部らと違って教育程度が高く、しかも文化程度の高い家柄の出身であった周恩来は、清朝皇帝であったものの、その後不幸な運命を辿った溥儀に対して常に同情的だったと言われている。

死去

その後、溥儀は中国を文化大革命の嵐が覆う中で癌に罹った。

清朝皇帝という「反革命的」な出自であった溥儀の治療を行って紅衛兵たちに攻撃されることを恐れた多くの病院から入院を拒否されたが、周恩来の指示で北京市内の病院に入院することになった。

果たして病院に紅衛兵たちが現れて非難したため医師たちが溥儀の治療行為を行わず放置されたが、事態を聞いて怒った周恩来は院長に直接電話して溥儀の治療を行わせた。

入院時には既に末期状態であり 1967 年に死去した。

死ぬ間際には、晩年に好物となった「日本のチキンラーメンを食べたい」と言っていたことが溥傑の夫人である浩の伝記により伝えられている。

死後

溥儀の遺骨は当初北京郊外の八宝山墓地に埋葬されたが、1995年河北省易県にある、清朝の歴代皇帝の陵墓清西陵の近くの民間墓地「華龍皇園」の経営者が、李淑賢に溥儀の墓を作ることを提案し、これに同意した李淑賢によって溥儀の遺骨は同墓地に移された。また、後に溥儀の墓のそばに、婉容と譚玉齡の墓も造られたが、婉容の遺骨は見つかっていないため縁の品のみが収められている。

それに関連して2004年に「愍皇帝」の諡号と「恭宗」の廟号が贈られた。

ただし、これらは公式に認められたものではなく、愛新覺羅家の遺族などの関係者から承認されているものではない。

改葬に関しても愛新覺羅家の遺族からの反対も受けている。

家族

正妻である婉容と側室である文繡と1922年に結婚するが、後に文繡と離婚、その後アヘン中毒になった婉容とも満洲国崩壊を受け逃亡する中生き別れになる。

なお、満洲国時代に北京の旗人出身の譚玉齡（他他拉氏、祥貴人）、長春の漢族出身の李玉琴（福貴人）を側室として迎えたが、それぞれ死別、離婚している。

1959年に特赦された後、1962年に看護婦をしていた漢族の李淑賢（1924年 - 1996年）と再婚し、その後の生涯を沿い遂げることになる。

しかし生涯で子はもうけていない。